

アルテイス



旅人とドワーフさん

スマホ体験版

こちらはスマホレイアウトの体験版になります。

グレイ背景で読みたい方は、六十七ページまで送って頂くようお願いいたします。

・ 出会い

長いこと揺られていた駅馬車から、トマス・オーネルは降りた。大きく伸びをする。

頭上では太陽の強い光が降り注いでいる。

首元をなでる爽やかな山風が心地良く、思ったよりも暑くなかった。やっとのこととで、ドワーフの村である、スタラントの村に着いた。

この村は鍛冶場を兼ね備えた鉱山で栄えている。

「おい、邪魔だ。どきな」

後ろを振り返ると、金属鎧で身を固めた男がいた。

手には大きな剣を提げている。

気だるげな様子で、犬でも追い払うかのように手を振った。

トマスは肩を竦めると、脇にどいてやる。

「かーっ、やっつと着いたぜ。これでシケた薬売りともおさらばだ」

「そりやどうも。シケた薬売りで悪かったね」

くすんだ金髪に、くたびれた旅装のトマスを、彼は鼻で笑った。

乗り合った人に文句を言うなど、ただの八つ当たりでしかなかったが、トマスは特に腹を立てることもなく返事を返した。

雪解けの季節を待って、ここに来たトマスは、採掘団を護衛する一行と乗り合わせた。彼らは、この仕事にあまり積極的ではないらしい。

聞きたくもないグチを聞かされるハメになった。

何でも、王都から採掘を任されているらしい。

「やっつとですかい。もう待ちくたびれましたよ」

「本当よねえ。毎年のことだけど、これだったら王都にいる方がマシだわ」

頭にバンダナを巻いた弓使いの青年と、身なりのきれいな身分あるらしき女性が、ぶちぶちと文句を垂れながら、リーダー格らしき金属鎧の男に続いて村へと歩いていく。

「採掘団の連中が珍しいかね、旅の方」

駅馬車の御者が話しかけてきた。

強い日差しに焼かれた肌に、いくつものシワが顔に刻まれた老人だった。

「まあね」

トマスは小さな笑みを浮かべる。

「何、この季節になるといつものことさ。数年前から、鉱山で金や宝石が見つかるようになってな。量自体は大したことないらしいんだが、それに王都の連中が目をつけたって訳さ」

「そんなのドワーフの人達は納得しないんじゃない？」

「そりゃ、一人一人に話を持ちかれりゃ、どつかれて終わりだろうよ」

「じゃあ、どうして？」

「ここの連中だって、作った武具売って飯を食べてるんだ。武具なんぞ、重くて運ぶだけで苦勞するし、王都に着くまでに何度か通行税も取られる。税を優遇してやるって言われりゃ、話を聞かんわけにもいかんのさ」

スタラントの村と王都は、街や村をいくつも経由する程の距離がある。

量の少ない金や宝石を加工して売っても、通行税の方が高くついてしまうそうさ。

一方で王都側には、お金以上の様々な利益があるのだろう。

一応はドワーフの人達に配慮してるらしく、ある程度確保できたらその年は引き上げていくそうさ。

「ま、ドワーフ族の作った武具はよく売れる。王都の騎士団でも使われてるだろうしな。

王都の連中だって、奴らを本気で怒らせる程、阿呆じゃあるまい」

御者から話を聞いたトマスは、肩に食い込んだ大きい皮のリュックを背負い直すと、村へ向けて歩き出した。

程なくして村に着いたトマスは、ドワーフ族らしい無骨な石造りの家屋の間を歩いていく。

遠くから、喧騒と鎚を振るう音が微かに聞こえてくる。宿屋を探そうと、辺りをウロウロしていたときに、それは起こった。

「おじいちゃんっ、本当に大丈夫！？　しっかりして！」
何やら、切羽詰まった女の子の声が聞こえてくる。

一体何事かと思い、声のする方へ行ってみる。

大通りから一本外れた道のそばで、ドワーフ族の男性が腰を押さえて倒れている。辺りには、運んでいたであろう荷物が散らばっている。

声の主であろう少女が、気遣うように男性に声をかけ続けていた。

「どうしたの？　何かあったの？」

そのまま放置しておくわけにもいかず、トマスは声をかける。

少女が、はっと顔を上げた。

赤いハンカチで頭を包み、肩より少し伸ばした茶色の髪は、耳元の一房だけを三つ編みにしている。

黄色いブラウスと、ハンカチの色とおそろいのスカートの上からエプロンをしている、素朴な女の子だった。

髪の間から、ドワーフ族の証である控えめに尖った耳が、可愛らしくのぞいている。

「あの……えっと……」

トマスが普段あまり見かけない人間だからか、少女はどう返事をしたものかと、迷っている。

「僕でよければ、手助けさせてもらおうよ」

トマスはそう言って、少女の返事を気にすることなく、男性のそばへとしゃがみ込んだ。脂汗を流して唸っている彼の手をそつとどけると、抑えていた部分の衣服を少しだけめくってみる。

特に血が出たりはしておらず、ぶつけたわけではないらしい。

この子はおじいちゃんと呼んでいたから、そう呼ばれる程度には、歳を重ねているのだ

ろう。

そして、辺りに散乱した荷物。

十中八九、お年寄りによくある腰痛だろう。

トマスは、雑のうからスクロールを取り出した。

スクロールというのは、魔術陣が書き込まれた紙のことで、魔力さえ通せば魔術師でなくとも魔術を使うことができる。

大抵は一度きりの使い捨てだが、少々値は張るものの、何度も使えるものもある。

スクロールを使わずとも、魔術自体は使えるのだが、術者の実力に左右されないという点から、仕事の他に護身用など、どうしても必要なものだけ持っていた。

魔力を込めた手をかざすと、ボンツと小さな音を立てて、スクロールの上に小さな氷の塊が現れる。

手早く取り出した革袋にそれを入れると、彼の腰の上に置いた。

彼女の祖父らしき男性のうめき声が小さくなる。

「あ、あの……お医者様なんですか？」

彼女は茶色の瞳に不安の色を浮かべながら、すがるような声音で尋ねてくる。

「薬売りだから医者ではないんだけどね——っと、応急処置ならこんなものかな」

トマスは、苦笑いを浮かべて答えた。

「申し訳ないけど荷物はそのままにしておいて、手伝ってもらっていいかい？」
「は、はいっ」

トマスが祖父らしき男性の体を持ち上げようとする、彼女も慌てて手を貸してくれる。本当なら一人で持ち上げて、助けてあげられたら恰好いいのだろう。

しかし、ドワーフ族の男性のずんぐりした体を、動かさずに持ち上げるのは、一人では少々厳しい。

ダメなときは素直に人に頼るのが一番だ。

彼女の案内で、えっちらおっちらと家まで運ぶと、そのまま寝室のベッドに寝かせる。治療に合わせて調合を施したポーションで、処置を済ませた。

寝室を出ると、彼女が落ち着かない様子で待っていた。

「私、エリーナ・アステルっていいいます。さっきは私の祖父を助けて頂いて、ありがとうございます」
「ごうございました」

彼女が頭を深々と下げた。

彼女は祖父と二人暮らしをしているという。

トマスは、ゆっくりと手を振った。

「そんな大したことはしてないから、気にしなくていいよ」

トマスも自己紹介をして、笑みを浮かべる。

彼女もほっとした表情を浮かべた。

しかしすぐに、どこか気まずそうな、こちらを伺うような視線を向けてくる。

「あの……お代のことなんですけど……」

「え？ お代？ あー……お代ね」

最初は何を言われているのか分からなかった。

しかしすぐに彼女が何を言いたいのか察した。

正直なところ、トマスは言われるまで考えてなかった。

「ポーションの配合を少し変えただけで、治療っていう程でもないよ。何なら余ってる食べ物でも分けてもらえれば……」

「そ、そんなわけにはいきませんっ」

トマスが気にしてないと言っても、エリーナは律儀な性格なのか、なかなか納得しよう

とはしない。

ドワーフと言えば鍛冶仕事が真っ先に思い浮かぶが、どこの家も裕福というわけではないらしい。

ここへ薬を売りに来たというのも、一応の目的ではある。

だが、この状況で彼女からお金を受け取るのは、あまり気が進まなかった。こういうときは一夜の宿を求めると、解決することが多い。

しかし、年頃の少女である彼女は祖父と二人暮らしで、その祖父が寝込んでいるとなると、それも難しそうである。

「とりあえず、その話はまた後にして、荷物を先に取りに行こうか」

トマスがそう言い出したとき、不意に玄関のドアが開いた。

「エリーナ。散らばってた荷物、持ってきてあげたわよ」

「リツカ、ありがとう」

リツカと呼ばれた彼女は、エリーナと歳の近そうな少女だった。

エリーナと同じくドワーフの証である小さな尖った耳に、左肩で茶髪をひとまとめにしている。

部屋の雰囲気を感じたのか、彼女はトマスに気づくと、じとつとした視線を向けてくる。

どうやらあまり歓迎されていないようだ。

エリーナが慌てて声をかける。

「リツカ！ トマスさんは、おじいちゃんを助けてくれたのよ」

それを聞いたリツカはため息をつくとき、表情を緩めた。

「そうだったの。……ごめんなさい。ここへ来る途中、王都の奴らが話してたのが聞こえたから、あんたもそうなのかなって思ってたさ」

「えっと、もしかして採掘団の護衛の？」

「そ。クソジジイが無理するからとか何とか聞こえてきちゃってさあ、腹立つたらありやしない」

大通りを歩いていた採掘団の護衛達は、エリーナ達に起こったことを見たわけではないようだが、聞こえてきた悲鳴から低俗なことを言っていたらしい。

二人が祖父を運んでいるのを、他の村人が教えてくれて、彼女はそれで分かったそうだ。今思えば、エリーナ達がいた場所は、大通りからそこまで離れていなかった。

トマスが声を聞いたときには、たまたま人通りが少なかつたのだろう。

そういえば、トマスがエリーナに声をかけたときに、彼女はためらう様子を見せていた。見慣れない人間である彼らを、見たからかもしれない。

どう考えたって自分達は余所者だし、戸惑うのも無理はない。

エリーナにイスを勧められたトマスは腰を落ち着ける。

三人でテーブルを囲んで、リツカとトマスがお互いに自己紹介を終えると、彼女はトマスに尋ねた。

「まあ、そういうわけなのよ。ところであんた、王都の連中じゃないなら、こんな所まで何しに来たわけ？」

「大した用事じゃないんだけど、火竜の洞窟っていうのがあるって聞いてさ」

「はあ？ 火竜の洞窟？ あんな所に宝なんてないわよ。あんた冒険者なの？」
冒険者というのは洞窟や遺跡などに潜って、モンスターの素材や遺跡の宝を手に入れることを生業とする者のことだ。

希少な素材や宝を手に入れることができれば、大きな見返りがあるものの、何の保証もなく、危険を伴うこともある職業である。

百年くらい前までは、大冒険者時代と呼ばれ、隆盛を極めた時代があった。
今では緩やかな減少傾向にある。

とはいえ、普通に見かける職業なので、そこまで実感があるわけではない。

「いやいや、僕は旅の薬売りだよ」

「本当かしら？ よく見たら腰に剣があるじゃない」

リツカはテーブルの下をのぞき込んだ。

トマスの腰には、やや短めのブロードソードがある。

「旅をするんだから、薬売りだって武器ぐらい持つさ。商人だって護身用に持ち歩くことは、よくあることじゃないか」

リツカは、それもそうねと言って、肩を竦めた。

「あ、あの……」

「うん？」

それまで会話を見守っていたエリーナが、遠慮がちにトマスに声をかける。

「トマスさんが、火竜の洞窟にどんな用事なのかは知りませんが、よろしかったら私が案内人をしてしまishょうか？」

案内人とは、冒険者や旅人が土地勘に詳しい現地の人に、金銭を払って案内を頼む仕事のことである。

その土地の情報が事前にあるかないかは、時として生死に係わることさえある。

移動に便利な旅道具を用意してもらえたり、案内人が元冒険者だったりすると、不測の事態にも対処しやすい、といったことも期待できる。

「うーん、そうだなあ……」

トマスは腕を組んで思案する。

正直、申し出はありがたい。

しかし、案内人に危険が全くないわけではない。

その一方で、エリーナが他の代案で、納得しなさそうなのも事実である。

「あそこならエリーナも何度か入ったことあるしね」

リツカが訳知り顔でニヤニヤする。

エリーナが拗ねたような表情を浮かべた。

「誰のせいだと思ってるの。私はいつも行きたくないって言ったのに」

「いいじゃーん。今では子供の頃のいい思い出になったじゃない」

トマスは、小さい頃のエリーナが困った顔をしながら、リツカに手を引かれていく様子を思わず想像してしまった。

結局リツカの勧めもあって、案内人をお願いしたトマスは、宿の場所を教えてもらうことにした。

・魔術師

すっかり日も暮れたその日の夜、喉が乾いたトマスは、宿の部屋から廊下へと出た。二階建ての宿屋の階段を降りていくと、一階は酒場兼食堂になっている。

これからが本番だと言わんばかりに、ドワーフの鋤夫らしき人達が、赤ら顔でエールを豪快に飲んでいる。

「おや、薬売りさん。どうしたんだい？」

宿屋の女将であるリリアーナが、トマスを見つけてカウンターから声をかけてくる。

「喉が渴いたから、飲み物でも貰おうと思って」

「エールでも飲むかい？　って言いたいところだけど、お前さんはそういう人間には見えないねえ」

リリアーナは、あっぱはつはと、歳を重ねた恰幅のいい体を揺すって笑った。

飲みたいものが決まったら呼んどくれ、と言いつ終えると、彼女は奥の厨房へと引っ込んでいった。

「なあ、ねーちゃん。人間は人間同士、仲良く飲もうぜ」

(ん……確かこの声は……)

酒場のカウンターからテーブルを眺めていたとき、そんな声が耳に入ってきた。

どっかで聞いた声だなと思いつつながら首を巡らすと、護衛のリーダー格の男がいた。

駅馬車で、さんざん聞いた声は嫌でも覚えている。

さすがに今は鎧は着けていないようだ。

リーダー格の男は、テーブルの上に腰を下ろしていた。

その横には、藍色のトンがり帽子に、真っ黒のローブ姿という、いかにもな魔術師の女の子が座っていた。

人間の旅人や冒険者も普通にいるんだなと、今更ながらどうでもいいことを思ってしまった。

歳はトマスより二つか三つは上ぐらいだろうか。

彼女は気にも留めていないらしい。

彼をまるでないかのように振舞って、飲み物の入った木のカップを傾けている。

トマスはどうしようか迷った。

昼間の件とは違い、彼女は明らかに旅慣れしているように見える。

そうでなければ、荒くれ者が集まる夜の酒場に一人で来るはずがない。

いざとなれば、魔術でどうにかできるといふ自信があるのだろう。

だが他人事と片付けるには、エリーナとリツカの顔が浮かんできて、見て見ぬふりがどうしてもできなかつた。

(やれやれ……)

結局、トマスはため息をつくと、重い腰を上げて二人に近づいていった。

「ちよつと、やめなよ」

「なんだあ？ ……つて、みずぼらしい薬売りじゃねえか。なんだよ、邪魔すんな」
いつの間にか呼び方が変わっているが、気にしないことにする。

「彼女、嫌がつてんじやん」

「はっ、お前みたいなガキには分からねえことだよ。ケガしたくなかつたらすっこんでろ」
「いや、僕は十七だからガキって程でもないんだけど……それより周り見てみたら？」

「……なんだと？」

彼が首を巡らすと、ドワーフの男達がチラチラとこちらを見ていた。

大抵は、人間同士のつまらないトラブルに、呆れているだけだ。

だが、なかには彼女にしつこく声をかけるその姿に、眉をひそめる者もいる。

彼が持っていた木のジョッキを強く握ったのが分かつた。

トマスに対する怒りか、それともドワーフ達に対する焦りからか。

「あなたは王都の依頼でここに来たんだろ？　なら、このドワーフの人達に悪い印象を持たれると、仕事がやりにくくなるんじゃないの？」

「チツ……」

男は舌打ちをして、こちらをひと睨みした後、意外とあっさり引き下がった。

王都からの依頼を盾にして、もう少し粘るかと思ったが、彼の仲間であろうバンダナの青年や、身分のあるらしき女性の元へと戻っていく。

駅馬車で聞かされたグチが、こんなところで役に立つとは思わなかった。

ふと彼女の方を見ると、彼女はカップを傾けたまま、じつとこちらを見ている。

切れ長の目をしている整った顔立ちの美人で、王都の貴族のような気品を感じる。

深い海のような青い瞳には、感謝も苛立ちの表情も浮かんでいなかった。

立ち去るのも気が引けたので、声をかける。

「前の席、いいかな？」

「……………」

彼女は何も言わないが、拒絶するような雰囲気は伝わってこない。

気を悪くさせないように、ゆっくりとイスに腰を下ろした。

「礼は言わないわよ。あんなの一人でもどうにかできたから」

彼女は木のカップをテーブルに置くと、開口一番にそう言った。

「いや、たまたま見かけたからさ。気にしなくていいよ」

トマスは微笑んでみせたが、彼女の雰囲気はあまり変わらなかった。

彼女の被っている藍色のトンがり帽子は、長い間風にさらされたのか、生地がへたつて半ばで折れている。

よく見れば、ローブの方も使い込まれているのが分かる。

テーブルに立てかけている杖には、瞳と同じ青い色の宝石が、はめ込まれている。

「えっと、魔術師……なんだよね？」

「それ以外の何に見えるのかしら？」

彼女は、つまらなそうに腰まで伸びた濡れ羽色の髪をいじる。

彼女からの、にべもない言葉に、トマスは愛想笑いを返すしかない。

魔術は大気中に漂う魔法素——マナと、自分の体内の魔力を混ぜ合わせることで使うことができる。

マナは大気から自分の体を触媒にして取り込むのだが、魔術師は自分の衣服に特殊な魔術を施すことで、身に着けるものからも、それを行うことができるのだ。

とんがり帽子やローブといった、かさ張るものを身に着け、髪を長く伸ばしているのもそのためだ。

魔術師は帽子が折れてからが一人前、という言葉はよく耳にしていた。

上に尖った帽子は、長く使い込むと生地が弱ったところから折れてくる。

長い間、風にさらされたりするのは、それだけ冒険者を続けて修練を積んだ証である。

彼女は一流の魔術師なのだろう。

トマスがどう話を続けようかと考えていると、リリアーナが近づいてきた。

魔術師の彼女が、空になった木のカップを手渡す。

「ごちそうさま。……それと、彼に果実水を」

さつきはああ言っていたが、彼女は何だかんだで感謝しているらしい。

「あんだ、なかなか見どころがあるじゃないか。人間にもいい人はいるんだねえ」

リリアーナはトマスに朗らかに笑いかけると、一つのカップを差し出した。

魔術師の彼女が頼むよりも先に、用意してくれたいらしい。

お代はいらないよ、と言ってリリアーナはカウンターに戻っていった。

トマスは、仕切り直しの意味も込めて、自己紹介する。

「僕はトマス・オーネルっていうんだ。君は？」

「リサ・ワーズノースよ」

「リサはどうしてスタラントに来たの？」

「採掘場の方に用事があるの」

あいまいな内容ではあったが、とりあえず普通に返事をしてくれたことに、トマスは果実水に口をつけながら内心ホツとする。

「ふーん、そうなんだ。僕は火竜の洞窟に用があるんだ。またどこかで見かけることもあるかもね」

「……あんな所に何の用があるのよ？」

トマスはごく軽い気持ちで言ったのだが、彼女は眉根を寄せつつも、意外にも食いついてくる。

「いや、何というか……宝でもあったらなああって思ってたさ」

「ウソね」

あいまいに答えるトマスに、彼女はピシヤリと返した。

彼女に鋭い一面があることに、トマスは驚いた。

「あなたは冒険者って感じじゃないわ」

彼女はじつとこちらを見据えてくる。

何をこだわっているのかトマスには見当もつかないが、正直に話さない、という雰囲気だけは伝わってくる。

後になってトマスは思った。

果実水で酔うはずもない。

あなときは、酒場の雰囲気には酔っていたのだと。

「僕はさ、アイデアのシズクっての探——」

ドンツ！

トマスは最後まで言わせてもらえなかった。

彼女はその言葉を聞くや否や、切れ長の目を見開いて、小さくも力強くテーブルを手で叩いた。

「それをどこで聞いたの」

「え？ ……ええ？」

「話さない。全部」

いつの間にか彼女の雰囲気が変わっていた。

こちらに向ける視線は、睨みつけてると言ってもいい。

だが、その表情は機嫌を損ねたというより、強い意志に火をつけてしまったと言った方

が、しつくりくる気がした。

トマスは息を静かに吐き出した。

彼女をなだめるように、両の手の平を押しように相手に向ける。

「まあ落ち着いてよ、知ってることは全部話すからさ」

父さんとの話はあまり話したくないが、今回は仕方ないだろう。

トマスはゆつくりと口を開いた。

トマスの両親は旅の薬売りだった。

物心ついたときには、両親は薬を売って生計を立てていた。

トマスはそんな両親の元で育った。

乳棒や乳鉢をオモチャにして遊んでは怒られ、作りかけの薬をダメにしては、父親からゲンコツを落とされた。

何が書いてあるのか口々に分からない薬の本の挿絵だけを眺めては、絵本の代わりにした。

眠るときに母親にそれを話すと、笑って聞いてくれた。

そんな生活があったと記憶に残るぐらいの歳にまでなったトマスは、両親に連れられて一軒の家へとやってきた。

今でこそ、それが王都のはずれだったと分かるが、当時は随分と大きな家だなあ、ぐらいにしか思わなかった。

「おれ、ガストンっていうんだ。よろしくな！」

初めて会った自分と年の近そうな男の子は、トマスにそう言うと、ニカッと笑った。赤銅色の髪を短く刈り上げた彼は、勢いよく手を差し出してくる。

トマスは気後れしながらも握手をする。

彼はブンブンと勢いよく振った。

それに合わせてトマスの体もガクガク揺れる。

ガストンに遠慮していたのは最初だけだった。

二人はすぐに仲良くなり、真っ黒に日焼けしながら野山を駆け回った。

トマスの両親は、時々どこかへ出かけている様子だったが、いつの間にかいなくなっていた。

だが、トマスには彼がいたから寂しくなかった。

「な、なあ……トマス。いもうとって、どんなんだろうな。や、やっぱやさしくしてやらないとダメだよな。アニキだったら」

ガストンに妹ができたとき、いつもはトマスを振り回している彼が、妙にうろたえる様子が見え、何だか無性に笑えてきたのを、今でも覚えている。

そして季節の巡りが一周終えたとき、両親は帰ってきた。

両親の衣服は、戦争でもやってきたのかと思う程にひどくボロボロだったが、両親は元氣な笑顔をトマスに向けてくれた。

また両親と一緒になんだとトマスは素直に喜んだ。

両親はその後、薬を売りに旅に出ることはなく、ガストンの家の畑仕事を手伝い、その合間に薬を作って、王都に売りに出ていた。

だが、そんな生活は長くは続かなかった。

元氣だったのは春の季節が過ぎた頃までだった。

最初の内は隠していたが、夏になると、どんどんとやせ衰えていった。薬を飲んでも、一向に治る様子がない。

冬になる頃には、二人そろって寝込むことが多くなった。

ある冬の朝、いつになく暖かかったその日、父親は珍しく起きてきた。

それどころか、落ちていくばかりだった食欲がまるでウソのように朝食を平らげると、トマスを散歩に連れ出した。

今まで寝込んでいたのに大丈夫なのかと気になったが、父親はお構いなしだ。枯草に霜の降りた坂道を、二人で白い息を吐きながら登っていく。

王都が遠目によく見える丘までやってくると、父親はおもむろに話し出した。

「トマス、アイデアのシズクって知ってるか？」

いきなりそう言われても、トマスには何のことやらさっぱりだった。

頭に疑問符だらけの息子を見て、父親は苦笑した。

「知らなくて当然だろうな。トマス、大きくなったらでいい。お前が旅をするようになったら、調べてくれると、父さんは嬉しいぞ」

父親はそう言って、息子の頭をなでた。

トマスは最後まで何のことか分からず、父親を不思議そうに見上げることしかできなかったが、父親はそれで満足したようだった。

今にして思えば、二人だけで話をしたかったのかもしれない。

そして新たな春を迎える頃、二人はこの世を去ってしまった。

それからの時間の流れは早かった。

ガストンと二人で、彼の妹の世話に四苦八苦し、気がついたら悪ガキ三人で遊び呆けていた。

カエルを捕まえて、川にガストンと二人で競って投げ込んで遊んでいると、こっそり後ろからやってきた彼の妹に、二人そろって川へ突き落とされた。

起き上がったガストンが妹を捕まえると、そのまま川へと放り投げる。

三人で腹を抱えてゲラゲラ笑った。

今にして思えば、二人は自分を気遣ってくれていたのかもしれない。

そんなことをしているうちに、ガストンは王都の騎士養成学校へ行くことになった。

トマスも誘われたが、それを機に旅に出ることにした。

その頃には、父親の最後の願いが、重要なものではないかと思いはじめたからだ。

全てを話し終わると、トマスは果実水を一口飲んだ。

酒場の喧騒が今更のように耳に戻ってきた気がする。

彼女は、何か考え込んでいる様子だった。

不意に顔を上げると、少し気遣うような素振りを見せた。

「その、悪かったわね。私も急に熱くなり過ぎたわ」

「別に気にしてないよ。もう随分昔のことだし、心の整理は終わってる。……そんなこんなで今に至るってわけ」

「そう……」

少し間を置いてからトマスは切り出した。

「良ければ、リサの話も聞かせてくれないかい？」

あれだけ強く迫ったのだ。

トマスと似たような事情があっても不思議ではない。

「私の方はあなたと少し違うけど、似たようなものね」

「へえ……？」

「私には、お姉様がいるんだけど、ずっと長い眠りについて」

「え、それって……」

彼女は緩やかに首を横に振った。

「死んだとかじゃなくて、今でもベッドで眠っているのよ」

「何かの病気なの？」

「何人もの医者や治癒術師に見せたけど、誰もが最後には言っただわ。お手上げだっただわ。彼女の家がお金持ちだと分かったが、今はどうでもいいことなので、とりあえず黙っておく。」

「だけど最後に話したときに、お姉様にこう言われたの。『一人前の魔術師になったら、東に行きなさい』って」

「え……東って言うと、一番奥にはエルフの森があるけど……」

王都を基準に考えた場合、大陸の東の終わりには、エルフの森が広がっている。

「私もエルフの森だと思って、東へ行ってみたの」

「へ、へえ……そうなんだ。行ってみたんだ……」

トマスはちよつと引き気味に返事をする。

「ただ漠然と東と言われても、それだけでは何のことを指していて、どうすればよいのかも分からないはずだ。」

わずかな情報を頼りに、そこまでするとは、なかなかの行動派のようだ。

彼女にとって、その姉はとても大切な家族らしい。

「でも結局、どうにもできなかつたの。エルフ達は、私のことなんてまるで相手にしてくれなかつた」

結局森に入れなかった彼女は、エルフの森を引き返して情報収集を行った。

しかし、何も成果は得られなかったという。

「あれ？ それだったら、どうしてここにいるの？」

スタラントの村は大陸の西にある。

奥が鉾山となっていることから、ここが西の終わりとなるが、正反対の方角である。

「私が探した限り、東には何も見つからなかったわ。だから、一度は家に戻ったの。それでお姉様の部屋に入ったら、机の上に手紙が置かれていたの」

宛名は何も書かれていなかったの、彼女は開けようか迷った。

長い時間を悩んだ末に開けてみると、その手紙は自分に宛てたものだったという。

彼女の姉は、必死に眠気と戦いながら書いたらしく、ほとんどの文字は崩れて読めなかったらしい。

時間をかけて何とか読み解いてみると、ほとんどは彼女を気遣う内容らしいと見当がついた。

そして残り数少ない、かろうじて正確に書かれた箇所は、たった一つの単語だけだった。

それが――

「「イデアのシズク」」

二人の声が重なった。

彼女がそこだけは正確に書いたということは、リサに何としても伝えたかった内容である可能性が高い。

だから彼女は、あれだけトマスに迫ったのだという。

本当なら、東に行けという数少ない情報と照らし合わせて考えるべきなのだろうが、エルフ達は相手にしてくれない。

東がダメだったので、ひとまずは西に行ってみることにしたという。まるで雲をつかむような話だ。

彼女は、姉に対してできることは、何でもしてあげたかったらしい。

「ねえ、もし良かったらなんだけど……私と組まない？」
「えっ？」

「私も、その……火竜の洞窟に用があるから」
少しためらったのは、最初にあいまいに答えてしまったからだろう。

「僕は構わないよ。人数は多いに越したことはないだろうし」
一流の魔術師である彼女と一緒に心強いだろう。

「じゃあ、これからよろしくね」

「ええ」

トマスが笑みを浮かべて手を差し出すと、彼女は、ほっそりした手で握り返してくれた。

・洞窟へ

翌朝、準備を終えたトマスは、宿屋の階下に降りていく。

あれだけ騒がしかった酒場兼食堂に、客の姿はほとんど見えない。

宿屋の出入口に程近いカウンターに、リサが座っていた。

トマスが大きな皮のリュックをリリアーナに預けていると、リサが近づいてきた。

「そういえばさ、魔術師ギルドで何か情報は得られなかったのかい？」

朝の挨拶もそこそこに、トマスはリサに尋ねた。

魔術師ギルドというのは、魔術師を支援する組織のことである。

大抵はどここの街や村にも支部があつて、魔術師ギルドに登録している魔術師は、支援を

受けることができる。

大冒険者時代には、戦士ギルドや盗賊ギルドなど、様々な職種のギルドが乱立していた時期もあつたらしい。

だが結局、支部の数が一番多かつた魔術師ギルドの組織力には敵わなかつたらしく、冒険者の数が緩やかに減りつつある今では、魔術師ギルド以外のほとんどのギルドが、姿を

消してしまい、魔術師ギルドと統合されていった。

今では冒険者ギルドとしての意味合いが強くなっており、名前はその名残のようなものである。

冒険者や魔術師でなくとも、普通の村人が何かの相談に行ったり、手に入った素材を売りに行くこともある。

しかし魔術師のギルドという部分はしつかりと残っており、魔術師なら優遇されることも多い。

だが彼女は残念そうに首を横に振った。

「一応行ってみたけど、ダメだったわ。村長の奥様と何人かの職員だけの小さなギルドだったから」

「うーん、そっか……」

このような山村のギルドでは、それも仕方ないのかもしれない。

「あ、そうだ。言い忘れてたんだけど、案内人を買って出てくれる子がいてさ」

「あら、そうなの？」

そこでトマスは、宿に来るまでの一連の流れを彼女に話した。

「ドワーフの人に案内を頼めるのはありがたいわ。もしかしたら洞窟内でドワーフの人に

しか分らないことがあるかもしれないし」
彼女は納得した様子でうなずいた。

二人で宿屋の外に出て待っていると、エリーナがやってきた。

「こんにちは、トマスさん。今日はよろしくお願いしますね」

そう言って彼女はにこやかに笑うと、隣のリサを見て不思議そうな顔をする。

「えっと、こちらの方は？」

リサが前に進み出てきて、微笑みを浮かべる。

「リサ・ワーズノースよ。彼と目的地が同じだから、一緒に行くことにしたの」

「そうなんですか。私はエリーナ・アステルっています。よろしくお願いしますね」

トマスは、リサが笑ったところを初めて見た。

そして彼女でも笑えるんだなと、結構失礼なことを思ってしまった。

「今日はお弁当を作ってきたんです。たくさんありますから、リサさんの分も用意できま
すよ」

彼女は、手にしたバスケットを見せてくる。

「悪いね。そこまでしてもらっちゃって」

ポーション一つに対する対価としては、既に超えてしまっている気がするのだが、あの後、エリーナの方から申し出てくれたので、無下にもできなかつたのだ。

「じゃあ、案内しますね。行きましようか」

大通りの緩やかな上り坂を歩いていくと、やがて採掘場前の広場が見えてきた。

採掘場なだけあって、辺りはゴツゴツとした岩だらけだ。

入口には半鐘の吊り下げられているヤグラがあった。

火竜の洞窟へは、ここから別の道があるそうだ。

ヤグラから一人のドワーフの男性が降りてきた。

「やあ、エリーナちゃんじゃないか」

「グレゴリーさん、こんにちは」

どうやらエリーナの知り合いらしい。

ドワーフの男性らしく、ずんぐりとした体形で、厚手の丈夫そうな作業着を着ている。

アゴの周りは真っ黒なヒゲが伸びていて、腕の太さはトマスの倍程もありそうだ。

クセの強い黒い髪が、頭を覆うように伸びている。

「グレゴリーさん、今日はお仕事はいいんですか？」

「いやほら、今は王都の連中が来てるだろ？　連中があっちこっちを行ったり来たりしててさ、正直、今日は仕事にならないんだよ。それで半鐘でも掃除しようかと思っでさ。僕だけじゃなくて、みんな今日はそんな感じだよ」

彼はやれやれと頭をかいた。

ドワーフの男性は老けたような顔の人が多く、みな似たような姿なので分かりづらいが、話し方からすると、自分達とそう変わらない年齢のようだ。

「ほんと、その通りよ。邪魔だったらありやしない」
そこへリツカがやってきた。

ガラガラと大きな手押し車を押していて、中には鉱山から掘り出された鉄鉱石らしきものが積まれている。

彼女は、いつも広場で手伝いをしているそうだ。

「鉱山の様子はどうなんだい？」

トマスは尋ねた。

「王都の連中が、何人かここで働いてる人を連れて行って掘らせてるわよ。んで、連中はその人達に掘るのを任せて、何してんのか知らないけど、あちこち調べてんのよ」

「へえ……なるほどね」

危険が伴う鉱山の中を必要以上にウロウロされて、迷惑であろうことは想像に難くなかった。

「エリーナちゃんは、どうしてここに？」

そこでエリーナはグレゴリーに二人を、リツカにリサを紹介する。

そして、火竜の洞窟へ二人を案内することを話した。

「ははあ……なるほど」

グレゴリーはエリーナやリツカと親しいらしく、訳知り顔で納得する。

よく見ると、小さく笑っているように見える。

「どうせヒマなんだし、あんたも手伝いなさいよ」

リツカはグレゴリーの肩をぱしんと叩いた。

「よしてくれよ、僕は冒険とかはごめんだ。家で装飾品の細工でもしてるほうがいいよ」

グレゴリーは首を竦めて、半鐘を拭いていたであろう布をいじった。

偏見でしかないのは分かっているが、彼は勇敢だと言われるドワーフ族の男性らしからぬ臆病な性格のようだ。

そんな事情もあって、今日は手の空いたドワーフ達は、鍛冶仕事の手伝いに行っている

者も多いらしい。

彼もこの後、手伝いに行くそうだ。

グレゴリーとリツカに見送られて、三人は火竜の洞窟へと歩いていった。

三人は火竜の洞窟へとたどり着くと、中へと入っていく。

洞窟の中はひんやりとしており、道の幅は意外にも広がった。

採掘場同様、ゴツゴツした岩が、むき出しになっている。

トマスは雑のうからランタンを取り出すと、火を点ける。

多少の明かりならば、魔術でも事足りるのだが、洞窟がどれだけ広いか分からない以上無暗に魔力を消耗するのは危険である。

それ故、魔術が日常生活に溶け込んでいても、こうした道具の出番が失われることにはならない。

先頭に立ったトマスは、洞窟内を歩き始める。

「エリーナは、ここに来たことがあるんだよね？」

「はい。子供の頃の話ですけどね。その頃にはモンスターが出ることもありませんでしたから」

モンスターとは、人を見ると襲ってくる怪物の総称のことである。

基本的には言葉は通じず、出会ったら逃げるか戦うしかない。

どうしてモンスターが生まれてくるのかは、誰にも分かっていない。

光の魔術を神聖魔術と呼び、信仰の対象とするナタリー教の解釈によれば、闇の魔術によつて作り出されたと言われているが、信者以外の人は信じていない人がほとんどだ。

「へえ……そうなの」

リサが返事をしたそのときだった。

「ギャギャギャギャ!!!」

下品な叫び声とともに、ランタンの光を反射して、不気味に光る目がいくつも見えてくる。

どんどん近づいてくるそれは、緑色の不気味な体を持つゴブリンだった。

粗末な布切れを腰に巻いており、手には石斧を持っている。

洞窟の奥が暗くて見えないので、何匹いるのか分からないが、二、三匹ではなさそうだ。

「さっそく出てきたわね」

リサは慣れた動きで前へ出ると、杖を構える。

「炎よ……獣の形となりて、我が敵を焼き尽くせ！ フレイムビースト！！」
杖の先から生まれた炎の塊は、みるみるうちに大きくなり、四本足のトラのような形になった。

炎の獣は地面を蹴りつけて、ゴブリンの群れへと突進していく。

「ギャウウウウ！！」

先頭を走っていたゴブリンが、為す術なく焼かれていく。

後続のゴブリン達は慌てふためくが、後ろがつかえているせいで、どうすることもできず次々と焼かれていく。

彼女は、あれだけの魔術を使っているのに、消耗している様子はない。

魔術師は魔術を使う際、自分の魔力の消耗が少なければ少ない程、マナの扱いが上手い程、熟練した魔術師と言える。

しかし、なかには知恵の働く者もいたようだ。

次々焼かれていく仲間を盾に、どうにか炎の獣の脇をすり抜けて、こちらへと向かって来る者が出始める。

トマスはランタンをエリーナに預けると、腰からブロードソードを引き抜いた。

「ギエイ！」

ゴブリンの無造作に振りかぶった一撃を、後ろに下がってかわすと、がら空きになったところに袈裟斬りを見舞う。

ゴブリンは、血飛沫を上げながら地面に倒れる。

後ろからやってくるゴブリンに、トマスが剣を構え直したときだった。

「トマスさん！ 横に跳んで下さい！」

後ろから聞こえたエリーナの声に、考えるより先に体が動いた。

右横へ体を動かしたトマスの左隣を、小さな斧が回転しながら通り過ぎていく。

エリーナが、腰に下げていた護身用の投げ斧を引き抜き、ランタンを持ったまま器用に投てきしたのだ。

バスケットは地面に置かれていた。

こちらへ突進してきていたゴブリンがすぐに気づいたが、もう遅い。

斧のスピードに自分達の突進のスピードまで加わり、先頭のゴブリンは哀れにも頭をかち割られる。

斧の威力はそれだけに留まらず、二匹三匹と次々にゴブリンを仕留めていく。

エリーナの投げた斧は、見た目はフランキスカと呼ばれる武器に近い。

この手の武器は、投げる際にバランスを取るために柄が長いことが多い。しかし、エリーナの投げた斧は、金槌よりやや長い程度の長さしかない。だがそんなことはお構いなしだ。

斧はゴブリンを葬りながら、串刺しにする軌道を描いて飛んでいく。

実に十匹ものゴブリンを仕留めたところで、ようやく岩にぶち当たって止まった。その岩ですら、いくつものヒビが入り、勢い余った斧がビィィンと震えている。

急所に当たらなかつたゴブリンも、斧が当たった部分は内部から爆発したような有様で、立ち上がってくる者は一匹もない。

エリーナはドワーフ族だ。

小柄な少女でモンスターと戦い慣れてなくても、人間より優れた腕力を持っている。頭では理解していたつもりだったが、こうもはつきりと見せられると、笑う他なかつた。

本来案内人が現役冒険者であることは少なく、元冒険者であっても、補助に回ることが多いのだが、彼女の場合は、当てはまらなそうだ。

結局ゴブリンのほとんどを、リサとエリーナが片付けてしまった。

トマスが倒したのは一匹だけだ。

一応このメンバー唯一の男のはずだが、恰好がつかないことこの上ない。

リサが岩に刺さった斧を引き抜いているエリーナに声をかける。

「ウワサには聞いていたけど、すごい威力なのね」

「い、いえいえ……そんな……」

エリーナは褒められて照れているのか、顔を赤くしている。

手にしている斧の刃は分厚く、あまり鋭いようには見えない。

刃が細くて鋭いと、ドワーフの腕力では衝突したときに折れてしまうからだろう。

「どうやら私が前に立った方が良さそうね」

エリーナからランタンを受け取って、リサは歩き出した。

トマスとエリーナもそれに続いていく。

モンスターの中では弱い部類に入るとはいえ、ゴブリンは数が結構多かった。

彼女に任せた方が安心だとトマスも思った。

洞窟の中を三人の足音だけが響いている。

「さっきのは、他のドワーフの人達もできることなの？」

リサは興味を持ったようで、エリーナに尋ねる。

「ドワーフの女の人なら誰でもできますよ。十歳になる頃には、親から練習させられるんです」

ドワーフの女性は護身のために、小さな斧の投てき術を身に付ける。

エリーナの祖父は彼女には優しかったが、この投てき術だけは、しっかりと身に付けさせられた。

木の実の採取などで山に入ったときに、野生の獣やモンスターと遭遇したときのための護身用らしい。

この斧は日常でもマキ割りなどの道具としても使えるので、持ち歩いていると困らない。先程は十匹ものゴブリンを倒したが、目的としては威嚇の意味合いが強い。

なぜ投げ斧なのかというと、女性は子供を授かるからなのだそう。

子供を身ごもっているのは、護身用の武器を持ち歩いても、満足に振るうことができない。飛び道具としては弓などもあるが、日常生活の中で持ち歩くには難がある。

使い捨てを前提としているものの、野生の獣が驚いて逃げたときなどは、そのまま拾って回収することもできる。

本来の用途からは逸れてしまいが、投げる前に襲いかかってくるときは、そのまま握って武器として使うこともできる。

鍛冶師の間でも広く取り扱われており、ドワーフの村では補充も容易なのだそう。スタラントは山の中にある村だ。

子供を授かったからといって、女性であつても仕事をしないわけにはいかないのだろう。「ちなみに、どうして広まったのかというのには、三つの説があるんですよ」
一つ目はドワーフの女性が木の伐採をしていたときに、大きなクマと遭遇し、伐採用の斧を豪快に投げつけて、仕留めたという逸話によるもの。

二つ目は鍛冶師の弟子が、親方から一人前になるための試練として、題材に上げられたというもの。

シンプルな小さい斧だからこそ、腕の見せどころというわけだ。

三つ目は若いドワーフの青年が、想いを寄せている女性に気持ちを伝えるものとして、手渡したというもの。愛の告白というやつだ。

受け取ってくれたら夫婦成立となり、周りから祝福されるのだ。

「私は三つ目だったらいいなあと思って思ってるんです」

エリーナが夢見心地な顔をしながら話した。

「ふふっ、そうね。夢があつていいと思うわ」

リサは前を向いているので顔は見えないが、楽しそうな雰囲気伝わってくる。

会話をしていた三人は、三叉路へとやってきた。

「これはどの道を行けばいいのかしら？ エリーナ」

道は上り坂になっっている左と、平坦な道の真ん中と右がある。

「洞窟の奥へ行くには、真ん中の道になります。左の上り坂は結構遠回りになるんですけど、採掘場に続いています。右は行き止まりですね」

「へえ、なるほど。エリーナに来てもらって助かったよ」

「そうね。採掘場にたどり着いていたら、無駄骨になっていたわ」

「お役に立って良かったです」

エリーナは嬉しそうに微笑んだ。

三人は洞窟を奥へと進んでいく。

トマスは、先頭を歩くりサの姿を眺める。

魔術師というのは不遇な職業である。

なぜなら、魔術師でなくとも魔術は広く使われているものだからである。

剣士であつても弓使いであつても、魔術は使えるし、トマスもいくつか身に付けている。

無論、魔術の種類によって向き不向きはあるし、全く使えない人が、いないわけではないが、そこまで深刻な問題でもない。

そして、モンスターを倒す、という点だけで見れば、魔術の習得の幅が広がっても、あまり意味がないのである。

炎の魔術であつても、風や土の魔術でも、倒すだけなら事足りるからだ。

例えば、砂漠にいるデザートリザードに、炎の魔術が若干効きにくいことは事実である。だが湿つた木材でも、大火力で焼き尽くせば炭になつてしまふように、魔術の種類による耐性は影響が小さく、効きにくいなら魔術の威力を上げれば良いだけである。

そもそも魔術にこだわる必要もない。

武器を持ち歩いて、それに対応すれば良いだけのことである。

飛び道具であるという点も、弓などで対処できるし、そういった相手にだけ覚えていゝる魔術で対応すればいい。

自分の魔力がなくなつてしまえば力を発揮できないのも、無視できない点である。

それでも魔術師を目指す人はいる。

ギルドを頼り、衣服からマナを得る術を身に付け、魔術の種類ごとの特徴を使い分けて魔術師達は戦う。

そもそも魔術師ギルドが大きな組織となつたのは、不遇と言われる魔術師達の立場を少しでも良いものにするためである。

彼女が一流の魔術師であることは、先程の戦いからも間違いない。

それ故に、彼女に今までどんな苦勞があつたかと思うと、トマスは複雑な気持ちになつ

た。

「そういえば、リサはどうしてこの洞窟に行こうと思ったんだい？」

「この洞窟から微かに魔力を感じたからよ」

「魔力？」

「ええ。二人は感じないかしら？」

トマスはエリーナと顔を見合わせる。

言われてみれば、そんな気がしないこともないが、正直なところよく分からない。

そんな二人の様子を感じたのか、リサは肩を竦める。

「何と言えばいいのかしら……暖かいスーパの上に立つ、湯気のような感じなのだけれ

ど……分からないなら、それでも構わないわ」

トマスは、あてもなく西を旅して、最後に、ここへたどり着いただけだ。

リサの話は聞いていたものの、彼女には、この洞窟に来た根拠があったようだ。

三人は、緩やかな下り坂になっている洞窟内を奥へと歩いていく。

時折ゴブリンが数匹現れては、三人で協力して倒していった。

しばらく歩いたところで、やがて開けた場所に出た。

天井が高くなっており、真ん中には大きな裂け目が走っている。

下をのぞいてみるが、黒インクを流し込んだように真っ黒な深淵が広がっているばかりだ。

こちらと向こう側をつなぐように橋が架けられている。

モンスターの気配は、これまで来た道にも、向こう側からも感じられない。

「どれだけ時間が経ったか分かりませんが、お昼にしましうか」

「そうだね。食べられるうちに食べといた方がいいよ」

エリーナの提案で昼食にすることにする。

橋のたもとに程近い場所に、三人は腰を落ち着ける。

エリーナは、バスケットを脇へと降ろした。

バスケットの中にあっただのは、野菜を挟んだ丸パンだった。

地面に向かって手を軽く振ると、地面がコの字に小さく盛り上がる。

バスケットから、手の平を広げたぐらいの小さなフライパンと、包んであつた肉を取り出した。

手をかざして炎を出すと、手慣れた様子で焼き始める。

「準備がいいね」

トマスは感心した様子でそれを眺める。

「一応火は通してあるんですけどね。温かい方が美味しいですから」

日常生活で使う魔術は、詠唱を必要とせず、身振り手振りですることが出来る。戦うときに使う魔術と比べると規模は知れているが、魔力の消耗も少ない。

エリーナは元々案内人なのだから、日常の魔術を使っても問題はないだろう。温まった肉をパンに挟んでもらうと、三人で口に運んだ。

野菜のシャキシャキ感の中に、温まった肉汁が染み込んできて美味しい。

エリーナの得意な日常の魔術は、火と土らしい。

橋の下から吹いてくる涼しい風に吹かれながら、三人は和気あいあいと食事を楽しんでいた。

・彼の日常

トマスが乗っていた商隊の馬車が急停止する。

「すまん、モンスターが現れた！ 戦える者は手を貸してくれ！」
商隊の仲間の一人が、大声を上げながら、次々と声をかけていく。

トマスは、老騎士と一緒に馬車を降りていった。

周囲では既に雇われた商隊の護衛が、モンスターと戦っている。

不意にその内の一体が、馬車の陰から躍り出てきた。

筋骨隆々の腕に、タルのような体を持つオークだった。

手には、粗末なこん棒が握られている。

「ふむ。この程度なら君でも対処できるだろう。後は任せるぞ」

(え……本気で言ってるの、この人……)

トマスが何か言おうとする前に、老騎士は走り去っていく。

トマスは右手のブロードソードと、左手にある老騎士から借りたラウンドシールドを構える。

他の連中が戦っているオークと比べると小柄で、成体前の個体なのかもしれない。それ以前に、モンスターに成長という概念があるのかどうか分からないが。

「やるしかないんだよなあ……」

トマスは逃げ出しなくなる気持ちを抑える。

「グオオオオオオオ！！」

オークが腹の底に響く絶叫を上げて、襲いかかってきた。

手に持ったこん棒を横薙ぎに振ってくる。

トマスは冷静に後ろに下がると、こん棒を振り切った直後のスキを逃さず、剣を振るう。

オークから不気味な色の血が飛び散り、血走った目でギョロリと睨みつけてくる。

出血で理性を失ったのか、オークはこん棒を滅茶苦茶に振り回した後、真上から振り下ろしてきた。

思わず避けそうになるが、両足で踏ん張って、ラウンドシールドで受け止める。

腕が折れたんじゃないかと思うような衝撃が襲ってくるが、そのまま体の外側へと盾を動かして軌道をずらすと、勢い余ったオークのこん棒が宙を泳いだ。

右手のブロードソードをオークの喉元に突き入れると、首がガクツと一瞬ブレた後、地響きを立ててオークは倒れた。

ドオン！！

何かがぶつかる衝撃音に、トマスがその方向へ顔を向けた。

武骨なタワーシールドで、老騎士がトマスと戦ったオークより二回りは大きいオークの攻撃を、真正面から受け止めていた。

老騎士の眼光は鋭く、今尚衰え知らずだった。

「ひえ……信じられない。化け物かな、あの人」

白髪の短い髪を衝撃で震わせながらも、一步も引いていない。

今年で六十を超えたとか言っていたが、どこにあんな力があるのだろうか。

「はあああああつ！！」

彼は両足を動かさなのまま、再度全身に力を込める。

辺りに再度鈍い音が響いた。

オークのこん棒と押し合いをしていた状態から、老騎士が自分の力だけで、押し返したのだ。

押し合いに負けたオークが、後ろへ数歩ふらついた。

そのスキを逃さず老騎士はタワーシールドを手放すと、裂帛の気合と共に、両手で握ったサーベルを真横へ一閃する。

腹を斬られたオークは、間欠泉のように血をまき散らしながら、後ろへと倒れていく。それを見届けて一息ついた老騎士は、呆然と自分を見ていたトマスと目が合った。途端に老騎士は相好を崩し、好々爺然とした顔になる。

「ほっほ。そちらも終わったようですね。いやお互い無事で良かった」
「ははは……」

トマスは何も言えなかった。

しばらくして、商隊を襲ったオークはすべて撃退できたとの知らせがもたらされる。護衛に雇われた治癒術師がケガ人を治療して、戦った者達が馬車に乗り込んでいく。やがて商隊は、ゆっくりと進み始める。

「君には、なかなか素質があるようだ。最後に君と巡り合えて良かった」
老騎士と隣り合って馬車の荷台の隅に座っていると、彼は満足そうにうなずいた。

「ははっ、そう言ってもらえて良かったです」

老騎士は王都での務めを終えて、これから故郷に帰るところなのだそうだ。

たまたま乗り合わせたトマスは、この老騎士と気が合った。

話しているうちに、トマスに武器を扱う能力がないと分かると、彼は首を緩やかに横に

振ったのだ。

『君、旅をするというなら、自分の身ぐらいは自分で守らなくてはいけないよ』
そう言っつて、老騎士は時間の合間、トマスに剣の扱い方を教えてくれた。

彼からしてみれば、最後の後進の育成をしている気分なのだろう。

もしくは、孫の相手でもしている気持ちだったのかもしれない。

最後の最後でオークを任されるとは、トマスは夢にも思わなかったが。

何日か日々が過ぎ去ると、老騎士は故郷近くの村で馬車を降りていった。

トマスは老騎士の教えを忘れないように、ヒマを見つけては剣を振っていた。

素質があると言われて、当時は嬉しかったのだ。

またある時、トマスは広大な湖を往復する渡し船に乗ったとき、ナタリー教の信者と乗り合わせた。

金色の長い髪をした若い女性だった。

既に結婚して子供もいるそうだが、とてもそうは見えない。

夫と子供を家に残して、聖地巡礼の旅に出ているという。

女性の一人旅は危険を伴うが、なにか事情があるのだろう。

他にも数人の旅人がおり、のどかな空気に包まれて船は向こう岸へと近づいていく。

ところが向こう岸へ着いた途端、草原の茂みから野犬の群れが襲いかかってきた。

のどかな空気は一変し、瞬く間に怒号と悲鳴が広がっていく。

渡し船にいた護衛が盾となり、一旦渡し船で岸を離れたが、信者の女性が船に乗り遅れてしまい、取り残されてしまった。

岸に戻れば、より多くの人が被害に遭う可能性があるのです、船は戻るに戻れない。

トマスは意を決して、皮のリュックを渡し守に預けると、船から助走をつけて岸へと飛び移った。

護衛達は鎧を身に着けていて、鎧を脱いでいたら間に合わない。

間一髪のところでは助けには入れたが、数で勝る野犬の群れは、決して楽な相手ではなかった。

無我夢中でブロードソードを振るい、なけなしの魔力で魔術を放った。

そうこうしているうちに、鎧を脱ぎ終えた護衛達が、船から飛び移ってきて加勢してくれた。

気がついたときには、野犬はみな地面に倒れていた。

「光よ……この手に癒しを与えたまえ……ヒールライト」

光の魔術を信仰の対象とするナタリー教の信者や教徒は、光の魔術の一つである治癒魔術を習得しようとする者が多い。

例え習得できるのが初歩の治癒魔術であつたとしても、信仰する対象をより身近に感じられるからなのだそうだ。

だが、丁度トマスの番になつたところで、彼女の魔力が尽きてしまった。

もしかしたら、彼女は光の魔術に向いていなかったのかもしれない。

魔術というのは、人によって向き不向きの素質が、ある程度決まっている。

それは種族由縁のものだったり、家系だったり様々だが、特に苦手な魔術に関しては個人差が強く出ると聞く。

苦手な魔術の場合、日常で使う魔術すら使えない者も珍しくない。

トマスは、自分の傷を自前のポーションで癒すことにした。

渡し船が戻ってきて、ようやくその場の全員が人心地ついた。

渡し守に預けた皮のリュックを返してもらっていると、彼女が近づいてきた。

一番最初に助けに入ったトマスに、お返しができないどころか、ポーションまで使わせ

てしまったことに、責任を感じているようだった。

自分用に持ち歩いているものを使ったのだが、彼女には慰めにならなかつたようだ。「じゃあ、代わりに光の魔術を教えてよ」

聞けば、彼女とは行き先が途中まで同じらしい。

道中でトマスは、彼女に光の魔術をいくつか教えてもらった。

何日か旅をするうちに、二人は分かれ道に差しかかった。

「魔術、教えてくれてありがとう」

「上達が早くて驚きましたわ。こんな短期間でここまで使えるようになった方、私、初めて見ました。もつと練習すれば、私よりも上手くなれますよ。これもナタリー様のお導きですわね」

最後に神様で締めくくろうとするのが彼女らしい。

彼女とはそこで別れて、トマスは道の先へ向けて歩き出した。

旅をしていると、トマスは色んな人に出会うことがあった。

薬を必要としていて、でもお金が払えないときは、トマスはその人から何かを学んだ。親切にも向こうから教えてくれたときもある。

トマスはそれを決して疎かにしているつもりはなかった。

ヒマを見つけては剣を振って、教えてくれた魔術を試した。

そして、トマスに指導をしてくれた人は、みんなこう言った。

「筋がいいね」と。

みんな口をそろえて。

だが、剣にしても魔術にしても、トマスの実力が、それ以上伸びることは無かった。実際には、少しずつ伸びてはいるのだろう。

だが成長速度が圧倒的に遅かった。

トマスは旅に出て本当に良かったと思った。

誰かと比べられたら、多分嫌な気持ちになっていただろうから。

・宝石

「雷よ……荒れ狂うムチとなりて、宙を駆け抜けろ！ ライトニングウィップ！」
「キイイイ！」

天井付近を飛んでいた大型のコウモリのナイトバットが、次々に電撃のムチに打たれ、地面に落ちてくる。

「ねえ……そろそろ引き返した方がいいと思う？」
リサが、少し迷う素振りで見かねてくる。

三人は、昼食を食べ終えて橋を渡り、洞窟の探索を続けていた。

「そうだなあ……洞窟の中だから分からないけど、もうお昼は過ぎたんじゃないかなあ……」

トマスは思案する。

お腹が空いて昼食をとったからといって、お昼であるとは限らない。

エリーナは、この洞窟のことは橋のあったところまでしか知らないらしい。

お力になれずすみません、と申し訳なさそうにする彼女だったが、エリーナは十分力に

なつてくれている。

「んー……もう少し行ってみて何もなかったら、今日のところは引き返そうか」
「そうね。今日一日に、こだわる必要もないわ」

リサもトマスの意見に同意する。

そのとき、不意にエリーナが立ち止まった。

「あの……何か変なニオイがしませんか？」

「え、ニオイ？」

トマスはくんくんと嗅いでみるが、特に違いを感じられなかった。

どうやらリサも同じようである。

妖精族であるドワーフは、人間よりも五感が優れているとされている。

トマス達には分からないニオイに気づいても、不思議ではなかった。

「もしかして、何かの毒なのかしら？」

リサが、警戒するように身構える。

「じゃあ調べてみようか」

トマスは雑のうからボロ布の包みを取り出すと、縛っていたヒモを緩める。

すぐに開いてしまわないように、少し強めに布の口をねじると、進行方向の暗闇に向かっ

て投げつけた。

ボフン、という音がして、ボロ布に包まれた粉末が飛び散った。

「明かり、照らしてみて」

トマスに言われるまま、リサはランタンを前へと突き出した。

辺りには黄色い粉末が舞っていた。

「もし毒だったら、この粉が緑色に変わるから、大丈夫だと思うよ」

これはトマスが解毒剤を応用して作ったものである。

怪しい場所に投げ込めば、空气中に毒が含まれているか、すぐに分かる。

欠点は粉まみれになって、息がしづらくなることだが、毒で命が脅かされるよりはマシである。

三人は一応前よりも警戒しながら、ゆっくりと洞窟内を歩いていく。

洞窟は、緩やかな下り坂が続いていた。

涼しかった洞窟内の気温が、わずかに上がってくる。

やがて三人は洞窟の奥へと、たどり着いた。

・あとかぎ

ここまでお読み下さり、ありがとうございます。

体験版はいかかでしたでしょうか？

この後、彼らは大変な事態と向き合うことになります。

なお、製品版には、ささやかですが、おまけの短編も付いています。

それでは製品版でお会いできることを願っております。

貴重な時間を割いていただき、ありがとうございました。

- ・ 本作品の画像及び文章の無断転載・複製・再配布・改変などはご遠慮下さい。
- ・ 本作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件とは一切関係ありません。
- ・ 本作品に関して発生したトラブルによる一切の責任を負いません。
- ・ 表紙イラストをブログやSNS等のアイコンや素材としての二次利用など、イラストレーター様のご迷惑となるような行為はご遠慮願います。

・ 出会い

長いこと揺られていた駅馬車から、トマス・オーネルは降りた。大きく伸びをする。

頭上では太陽の強い光が降り注いでいる。

首元をなでる爽やかな山風が心地良く、思ったよりも暑くなかった。やっとのこととで、ドワーフの村である、スタラントの村に着いた。

この村は鍛冶場を兼ね備えた鉱山で栄えている。

「おい、邪魔だ。どきな」

後ろを振り返ると、金属鎧で身を固めた男がいた。

手には大きな剣を提げている。

気だるげな様子で、犬でも追い払うかのように手を振った。

トマスは肩を竦めると、脇にどいてやる。

「かーっ、やっつと着いたぜ。これでシケた薬売りともおさらばだ」

「そりやどうも。シケた薬売りで悪かったね」

くすんだ金髪に、くたびれた旅装のトマスを、彼は鼻で笑った。

乗り合った人に文句を言うなど、ただの八つ当たりでしかなかったが、トマスは特に腹を立てることもなく返事を返した。

雪解けの季節を待って、ここに来たトマスは、採掘団を護衛する一行と乗り合わせた。

彼らは、この仕事にあまり積極的ではないらしい。

聞きたくもないグチを聞かされるハメになった。

何でも、王都から採掘を任されているらしい。

「やっつとですかい。もう待ちくたびれましたよ」

「本当よねえ。毎年のことだけど、これだったら王都にいる方がマシだわ」

頭にバンダナを巻いた弓使いの青年と、身なりのきれいな身分あるらしき女性が、ぶちぶちと文句を垂れながら、リーダー格らしき金属鎧の男に続いて村へと歩いていく。

「採掘団の連中が珍しいかね、旅の方」

駅馬車の御者が話しかけてきた。

強い日差しに焼かれた肌に、いくつものシワが顔に刻まれた老人だった。

「まあね」

トマスは小さな笑みを浮かべる。

「何、この季節になるといつものことさ。数年前から、鉱山で金や宝石が見つかるようになってな。量自体は大したことないらしいんだが、それに王都の連中が目をつけたって訳さ」

「そんなのドワーフの人達は納得しないんじゃない？」

「そりゃ、一人一人に話を持ちかれりゃ、どつかれて終わりだろうよ」

「じゃあ、どうして？」

「ここの連中だって、作った武具売って飯を食べてるんだ。武具なんぞ、重くて運ぶだけで苦勞するし、王都に着くまでに何度か通行税も取られる。税を優遇してやるって言われりゃ、話を聞かんわけにもいかんのさ」

スタラントの村と王都は、街や村をいくつも経由する程の距離がある。

量の少ない金や宝石を加工して売っても、通行税の方が高くついてしまうそうさ。

一方で王都側には、お金以上の様々な利益があるのだろう。

一応はドワーフの人達に配慮してるらしく、ある程度確保できたらその年は引き上げていくそうさ。

「ま、ドワーフ族の作った武具はよく売れる。王都の騎士団でも使われてるだろうしな。

王都の連中だって、奴らを本気で怒らせる程、阿呆じゃあるまい」

御者から話を聞いたトマスは、肩に食い込んだ大きい皮のリュックを背負い直すと、村へ向けて歩き出した。

程なくして村に着いたトマスは、ドワーフ族らしい無骨な石造りの家屋の間を歩いていく。

遠くから、喧騒と鎚を振るう音が微かに聞こえてくる。

宿屋を探そうと、辺りをウロウロしていたときに、それは起こった。

「おじいちゃんっ、本当に大丈夫！？　しっかりして！」

何やら、切羽詰まった女の子の声が聞こえてくる。

一体何事かと思い、声のする方へ行ってみる。

大通りから一本外れた道のそばで、ドワーフ族の男性が腰を押さえて倒れている。

辺りには、運んでいたであろう荷物が散らばっている。

声の主であろう少女が、気遣うように男性に声をかけ続けていた。

「どうしたの？　何かあったの？」

そのまま放置しておくわけにもいかず、トマスは声をかける。

少女が、はっと顔を上げた。

赤いハンカチで頭を包み、肩より少し伸ばした茶色の髪は、耳元の一房だけを三つ編みにしている。

黄色いブラウスと、ハンカチの色とおそろいのスカートの上からエプロンをしている、素朴な女の子だった。

髪の間から、ドワーフ族の証である控えめに尖った耳が、可愛らしくのぞいている。

「あの……えっと……」

トマスが普段あまり見かけない人間だからか、少女はどう返事をしたものかと、迷っている。

「僕でよければ、手助けさせてもらおうよ」

トマスはそう言って、少女の返事を気にすることなく、男性のそばへとしゃがみ込んだ。脂汗を流して唸っている彼の手をそつとどけると、抑えていた部分の衣服を少しだけめくってみる。

特に血が出たりはしておらず、ぶつけたわけではないらしい。

この子はおじいちゃんと呼んでいたから、そう呼ばれる程度には、歳を重ねているのだ

ろう。

そして、辺りに散乱した荷物。

十中八九、お年寄りによくある腰痛だろう。

トマスは、雑のうからスクロールを取り出した。

スクロールというのは、魔術陣が書き込まれた紙のことで、魔力さえ通せば魔術師でなくとも魔術を使うことができる。

大抵は一度きりの使い捨てだが、少々値は張るものの、何度も使えるものもある。

スクロールを使わずとも、魔術自体は使えるのだが、術者の実力に左右されないという点から、仕事の他に護身用など、どうしても必要なものだけ持っていた。

魔力を込めた手をかざすと、ボンツと小さな音を立てて、スクロールの上に小さな氷の塊が現れる。

手早く取り出した革袋にそれを入れると、彼の腰の上に置いた。

彼女の祖父らしき男性のうめき声が小さくなる。

「あ、あの……お医者様なんですか？」

彼女は茶色の瞳に不安の色を浮かべながら、すがるような声音で尋ねてくる。

「薬売りだから医者ではないんだけどね——っと、応急処置ならこんなものかな」

トマスは、苦笑いを浮かべて答えた。

「申し訳ないけど荷物はそのままにしておいて、手伝ってもらっていいかい？」
「は、はいっ」

トマスが祖父らしき男性の体を持ち上げようとする、彼女も慌てて手を貸してくれる。本当なら一人で持ち上げて、助けてあげられたら恰好いいのだろう。

しかし、ドワーフ族の男性のずんぐりした体を、動かさずに持ち上げるのは、一人では少々厳しい。

ダメなときは素直に人に頼るのが一番だ。

彼女の案内で、えっちらおっちらと家まで運ぶと、そのまま寝室のベッドに寝かせる。治療に合わせて調合を施したポーションで、処置を済ませた。

寝室を出ると、彼女が落ち着かない様子で待っていた。

「私、エリーナ・アステルっていいいます。さっきは私の祖父を助けて頂いて、ありがとうございます」
「うざいました」

彼女が頭を深々と下げた。

彼女は祖父と二人暮らしをしているという。

トマスは、ゆっくりと手を振った。

「そんな大したことはしてないから、気にしなくていいよ」

トマスも自己紹介をして、笑みを浮かべる。

彼女もほっとした表情を浮かべた。

しかしすぐに、どこか気まずそうな、こちらを伺うような視線を向けてくる。

「あの……お代のことなんですけど……」

「え？ お代？ あー……お代ね」

最初は何を言われているのか分からなかった。

しかしすぐに彼女が何を言いたいのか察した。

正直なところ、トマスは言われるまで考えてなかった。

「ポーションの配合を少し変えただけで、治療っていう程でもないよ。何なら余ってる食べ物でも分けてもらえれば……」

「そ、そんなわけにはいきませんっ」

トマスが気にしてないと言っても、エリーナは律儀な性格なのか、なかなか納得しよう

とはしない。

ドワーフと言えば鍛冶仕事が真っ先に思い浮かぶが、どこの家も裕福というわけではないらしい。

ここへ薬を売りに来たというのも、一応の目的ではある。

だが、この状況で彼女からお金を受け取るのは、あまり気が進まなかった。こういうときは一夜の宿を求めると、解決することが多い。

しかし、年頃の少女である彼女は祖父と二人暮らしで、その祖父が寝込んでいるとなると、それも難しそうである。

「とりあえず、その話はまた後にして、荷物を先に取りに行こうか」

トマスがそう言い出したとき、不意に玄関のドアが開いた。

「エリーナ。散らばってた荷物、持ってきてあげたわよ」

「リツカ、ありがとう」

リツカと呼ばれた彼女は、エリーナと歳の近そうな少女だった。

エリーナと同じくドワーフの証である小さな尖った耳に、左肩で茶髪をひとまとめにしている。

部屋の雰囲気を感じたのか、彼女はトマスに気づくと、じとつとした視線を向けてくる。

どうやらあまり歓迎されていないようだ。

エリーナが慌てて声をかける。

「リツカ！ トマスさんは、おじいちゃんを助けてくれたのよ」

それを聞いたリツカはため息をつくど、表情を緩めた。

「そうだったの。……ごめんなさい。ここへ来る途中、王都の奴らが話してたのが聞こえたから、あんたもそうなのかなって思ってたさ」

「えっと、もしかして採掘団の護衛の？」

「そ。クソジジイが無理するからとか何とか聞こえてきちゃってさあ、腹立つたらありやしない」

大通りを歩いていた採掘団の護衛達は、エリーナ達に起こったことを見たわけではないようだが、聞こえてきた悲鳴から低俗なことを言っていたらしい。

二人が祖父を運んでいるのを、他の村人が教えてくれて、彼女はそれで分かったそうだ。今思えば、エリーナ達がいた場所は、大通りからそこまで離れていなかった。

トマスが声を聞いたときには、たまたま人通りが少なかつたのだろう。

そういえば、トマスがエリーナに声をかけたときに、彼女はためらう様子を見せていた。見慣れない人間である彼らを、見たからかもしれない。

どう考えたって自分達は余所者だし、戸惑うのも無理はない。

エリーナにイスを勧められたトマスは腰を落ち着ける。

三人でテーブルを囲んで、リツカとトマスがお互いに自己紹介を終えると、彼女はトマスに尋ねた。

「まあ、そういうわけなのよ。ところであんた、王都の連中じゃないなら、こんな所まで何しに来たわけ？」

「大した用事じゃないんだけど、火竜の洞窟っていうのがあるって聞いてさ」

「はあ？ 火竜の洞窟？ あんな所に宝なんてないわよ。あんた冒険者なの？」

冒険者というのは洞窟や遺跡などに潜って、モンスターの素材や遺跡の宝を手に入れることを生業とする者のことだ。

希少な素材や宝を手に入れることができれば、大きな見返りがあるものの、何の保証もなく、危険を伴うこともある職業である。

百年くらい前までは、大冒険者時代と呼ばれ、隆盛を極めた時代があった。今では緩やかな減少傾向にある。

とはいえ、普通に見かける職業なので、そこまで実感があるわけではない。

「いやいや、僕は旅の薬売りだよ」

「本当かしら？ よく見たら腰に剣があるじゃない」

リツカはテーブルの下をのぞき込んだ。

トマスの腰には、やや短めのブロードソードがある。

「旅をするんだから、薬売りだって武器ぐらい持つさ。商人だって護身用に持ち歩くことは、よくあることじゃないか」

リツカは、それもそうねと言って、肩を竦めた。

「あ、あの……」

「うん？」

それまで会話を見守っていたエリーナが、遠慮がちにトマスに声をかける。

「トマスさんが、火竜の洞窟にどんな用事なのかは知りませんが、よろしかったら私が案内人をしてしまishょうか？」

案内人とは、冒険者や旅人が土地勘に詳しい現地の人に、金銭を払って案内を頼む仕事のことである。

その土地の情報が事前にあるかないかは、時として生死に係わることさえある。

移動に便利な旅道具を用意してもらえたり、案内人が元冒険者だったりすると、不測の事態にも対処しやすい、といったことも期待できる。

「うーん、そうだなあ……」

トマスは腕を組んで思案する。

正直、申し出はありがたい。

しかし、案内人に危険が全くないわけではない。

その一方で、エリーナが他の代案で、納得しなさそうなのも事実である。

「あそこならエリーナも何度か入ったことあるしね」

リツカが訳知り顔でニヤニヤする。

エリーナが拗ねたような表情を浮かべた。

「誰のせいだと思ってるの。私はいつも行きたくないって言ったのに」

「いいじゃーん。今では子供の頃のいい思い出になったじゃない」

トマスは、小さい頃のエリーナが困った顔をしながら、リツカに手を引かれていく様子を思わず想像してしまった。

結局リツカの勧めもあって、案内人をお願いしたトマスは、宿の場所を教えてもらうことにした。

・魔術師

すっかり日も暮れたその日の夜、喉が乾いたトマスは、宿の部屋から廊下へと出た。二階建ての宿屋の階段を降りていくと、一階は酒場兼食堂になっている。

これからが本番だと言わんばかりに、ドワーフの鋤夫らしき人達が、赤ら顔でエールを豪快に飲んでいる。

「おや、薬売りさん。どうしたんだい？」

宿屋の女将であるリリアーナが、トマスを見つけてカウンターから声をかけてくる。

「喉が渴いたから、飲み物でも貰おうと思って」

「エールでも飲むかい？　って言いたいところだけど、お前さんはそういう人間には見えないねえ」

リリアーナは、あっぱはつはと、歳を重ねた恰幅のいい体を揺すって笑った。

飲みたいものが決まったら呼んどくれ、と言いつ終えると、彼女は奥の厨房へと引っ込んでいった。

「なあ、ねーちゃん。人間は人間同士、仲良く飲もうぜ」

(ん……確かこの声は……)

酒場のカウンターからテーブルを眺めていたとき、そんな声が耳に入ってきた。

どっかで聞いた声だなと思いつつながら首を巡らすと、護衛のリーダー格の男がいた。

駅馬車で、さんざん聞いた声は嫌でも覚えている。

さすがに今は鎧は着けていないようだ。

リーダー格の男は、テーブルの上に腰を下ろしていた。

その横には、藍色のトンがり帽子に、真っ黒のローブ姿という、いかにもな魔術師の女の子が座っていた。

人間の旅人や冒険者も普通にいるんだなと、今更ながらどうでもいいことを思ってしまった。

歳はトマスより二つか三つは上ぐらいだろうか。

彼女は気にも留めていないらしい。

彼をまるでないかのように振舞って、飲み物の入った木のカップを傾けている。

トマスはどうしようか迷った。

昼間の件とは違い、彼女は明らかに旅慣れしているように見える。

そうでなければ、荒くれ者が集まる夜の酒場に一人で来るはずがない。

いざとなれば、魔術でどうにかできるといふ自信があるのだろう。

だが他人事と片付けるには、エリーナとリツカの顔が浮かんできて、見て見ぬふりがどうしてもできなかつた。

(やれやれ……)

結局、トマスはため息をつくと、重い腰を上げて二人に近づいていった。

「ちよつと、やめなよ」

「なんだあ？ ……って、みずぼらしい薬売りじゃねえか。なんだよ、邪魔すんな」
いつの間にか呼び方が変わっているが、気にしないことにする。

「彼女、嫌がってんじやん」

「はっ、お前みたいなガキには分からねえことだよ。ケガしたくなかつたらすっこんでろ」
「いや、僕は十七だからガキって程でもないんだけど……それより周り見てみたら？」

「……なんだと？」

彼が首を巡らすと、ドワーフの男達がチラチラとこちらを見ていた。

大抵は、人間同士のつまらないトラブルに、呆れているだけだ。

だが、なかには彼女にしつこく声をかけるその姿に、眉をひそめる者もいる。

彼が持っていた木のジョッキを強く握ったのが分かつた。

トマスに対する怒りか、それともドワーフ達に対する焦りからか。

「あんたは王都の依頼でここに来たんだろ？　なら、このドワーフの人達に悪い印象を持たれると、仕事がやりにくくなるんじゃないの？」

「チツ……」

男は舌打ちをして、こちらをひと睨みした後、意外とあっさり引き下がった。

王都からの依頼を盾にして、もう少し粘るかと思ったが、彼の仲間であろうバンダナの青年や、身分のあるらしき女性の元へと戻っていく。

駅馬車で聞かされたグチが、こんなところで役に立つとは思わなかった。

ふと彼女の方を見ると、彼女はカップを傾けたまま、じつとこちらを見ている。

切れ長の目をしている整った顔立ちの美人で、王都の貴族のような気品を感じる。

深い海のような青い瞳には、感謝も苛立ちの表情も浮かんでいなかった。

立ち去るのも気が引けたので、声をかける。

「前の席、いいかな？」

「……………」

彼女は何も言わないが、拒絶するような雰囲気は伝わってこない。

気を悪くさせないように、ゆっくりとイスに腰を下ろした。

「礼は言わないわよ。あんなの一人でもどうにかできたから」

彼女は木のカップをテーブルに置くと、開口一番にそう言った。

「いや、たまたま見かけたからさ。気にしなくていいよ」

トマスは微笑んでみせたが、彼女の雰囲気はあまり変わらなかった。

彼女の被っている藍色のトンがり帽子は、長い間風にさらされたのか、生地がへたって半ばで折れている。

よく見れば、ローブの方も使い込まれているのが分かる。

テーブルに立てかけている杖には、瞳と同じ青い色の宝石が、はめ込まれている。

「えっと、魔術師……なんだよね？」

「それ以外の何に見えるのかしら？」

彼女は、つまらなそうに腰まで伸びた濡れ羽色の髪をいじる。

彼女からの、にべもない言葉に、トマスは愛想笑いを返すしかない。

魔術は大気中に漂う魔法素——マナと、自分の体内の魔力を混ぜ合わせることで使うことが出来る。

マナは大気から自分の体を触媒にして取り込むのだが、魔術師は自分の衣服に特殊な魔術を施すことで、身に着けるものからも、それを行うことが出来るのだ。

とんがり帽子やローブといった、かさ張るものを身に着け、髪を長く伸ばしているのもそのためだ。

魔術師は帽子が折れてからが一人前、という言葉はよく耳にしていた。

上に尖った帽子は、長く使い込むと生地が弱ったところから折れてくる。

長い間、風にさらされたりするのは、それだけ冒険者を続けて修練を積んだ証である。

彼女は一流の魔術師なのだろう。

トマスがどう話を続けようかと考えていると、リリアーナが近づいてきた。

魔術師の彼女が、空になった木のカップを手渡す。

「ごちそうさま。……それと、彼に果実水を」

さっきはああ言っていたが、彼女は何だかんだで感謝しているらしい。

「あんだ、なかなか見どころがあるじゃないか。人間にもいい人はいるんだねえ」

リリアーナはトマスに朗らかに笑いかけると、一つのカップを差し出した。

魔術師の彼女が頼むよりも先に、用意してきてくれたらしい。

お代はいらないよ、と言ってリリアーナはカウンターに戻っていった。

トマスは、仕切り直しの意味も込めて、自己紹介する。

「僕はトマス・オーネルっていうんだ。君は？」

「リサ・ワーズノースよ」

「リサはどうしてスタラントに来たの？」

「採掘場の方に用事があるの」

あいまいな内容ではあったが、とりあえず普通に返事をしてくれたことに、トマスは果実水に口をつけながら内心ホツとする。

「ふーん、そうなんだ。僕は火竜の洞窟に用があるんだ。またどこかで見かけることもあるかもね」

「……あんな所に何の用があるのよ？」

トマスはごく軽い気持ちで言ったのだが、彼女は眉根を寄せつつも、意外にも食いついてくる。

「いや、何というか……宝でもあったらなああって思ってたさ」

「ウソね」

あいまいに答えるトマスに、彼女はピシヤリと返した。

彼女に鋭い一面があることに、トマスは驚いた。

「あなたは冒険者って感じじゃないわ」

彼女はじつとこちらを見据えてくる。

何をこだわっているのかトマスには見当もつかないが、正直に話さない、という雰囲気だけは伝わってくる。

後になってトマスは思った。

果実水で酔うはずもない。

あなときは、酒場の雰囲気には酔っていたのだと。

「僕はさ、アイデアのシズクっての探——」

ドンツ！

トマスは最後まで言わせてもらえなかった。

彼女はその言葉を聞くや否や、切れ長の目を見開いて、小さくも力強くテーブルを手で叩いた。

「それをどこで聞いたの」

「え？ ……ええ？」

「話さない。全部」

いつの間にか彼女の雰囲気が変わっていた。

こちらに向ける視線は、睨みつけてると言ってもいい。

だが、その表情は機嫌を損ねたというより、強い意志に火をつけてしまったと言った方

が、しつくりくる気がした。

トマスは息を静かに吐き出した。

彼女をなだめるように、両の手の平を押しように相手に向ける。

「まあ落ち着いてよ、知ってることは全部話すからさ」

父さんとの話はあまり話したくないが、今回は仕方ないだろう。

トマスはゆつくりと口を開いた。

トマスの両親は旅の薬売りだった。

物心ついたときには、両親は薬を売って生計を立てていた。

トマスはそんな両親の元で育った。

乳棒や乳鉢をオモチャにして遊んでは怒られ、作りかけの薬をダメにしては、父親からゲンコツを落とされた。

何が書いてあるのか口々に分からない薬の本の挿絵だけを眺めては、絵本の代わりにした。

眠るときに母親にそれを話すと、笑って聞いてくれた。

そんな生活があったと記憶に残るぐらいの歳にまでなったトマスは、両親に連れられて一軒の家へとやってきた。

今でこそ、それが王都のはずれだったと分かるが、当時は随分と大きな家だなあ、ぐらいにしか思わなかった。

「おれ、ガストンっていうんだ。よろしくな！」

初めて会った自分と年の近そうな男の子は、トマスにそう言うと、ニカツと笑った。赤銅色の髪を短く刈り上げた彼は、勢いよく手を差し出してくる。

トマスは気後れしながらも握手をする。

彼はブンブンと勢いよく振った。

それに合わせてトマスの体もガクガク揺れる。

ガストンに遠慮していたのは最初だけだった。

二人はすぐに仲良くなり、真っ黒に日焼けしながら野山を駆け回った。

トマスの両親は、時々どこかへ出かけている様子だったが、いつの間にかいなくなっていた。

だが、トマスには彼がいたから寂しくなかった。

「な、なあ……トマス。いもうとって、どんなんだろうな。や、やっぱやさしくしてやらないとダメだよな。アニキだったら」

ガストンに妹ができたとき、いつもはトマスを振り回している彼が、妙にうろたえる様子が何だか無性に笑えてきたのを、今でも覚えている。

そして季節の巡りが一周終えたとき、両親は帰ってきた。

両親の衣服は、戦争でもやってきたのかと思う程にひどくボロボロだったが、両親は元気な笑顔をトマスに向けてくれた。

また両親と一緒になんだとトマスは素直に喜んだ。

両親はその後も薬を売りに旅に出ることはなく、ガストンの家の畑仕事を手伝い、その合間に薬を作って、王都に売りに出ていた。

だが、そんな生活は長くは続かなかった。

元気だったのは春の季節が過ぎた頃までだった。

最初の内は隠していたが、夏になると、どんどんとやせ衰えていった。薬を飲んでも、一向に治る様子がない。

冬になる頃には、二人そろって寝込むことが多くなった。

ある冬の朝、いつになく暖かかったその日、父親は珍しく起きてきた。

それどころか、落ちていくばかりだった食欲がまるでウソのように朝食を平らげると、トマスを散歩に連れ出した。

今まで寝込んでいたのに大丈夫なのかと気になったが、父親はお構いなしだ。枯草に霜の降りた坂道を、二人で白い息を吐きながら登っていく。

王都が遠目によく見える丘までやってくると、父親はおもむろに話し出した。

「トマス、アイデアのシズクって知ってるか？」

いきなりそう言われても、トマスには何のことやらさっぱりだった。

頭に疑問符だらけの息子を見て、父親は苦笑した。

「知らなくて当然だろうな。トマス、大きくなったらでいい。お前が旅をするようになったら、調べてくれると、父さんは嬉しいぞ」

父親はそう言って、息子の頭をなでた。

トマスは最後まで何のことか分からず、父親を不思議そうに見上げることしかできなかったが、父親はそれで満足したようだった。

今にして思えば、二人だけで話をしたかったのかもしれない。

そして新たな春を迎える頃、二人はこの世を去ってしまった。

それからの時間の流れは早かった。

ガストンと二人で、彼の妹の世話に四苦八苦し、気がついたら悪ガキ三人で遊び呆けていた。

カエルを捕まえて、川にガストンと二人で競って投げ込んで遊んでいると、こっそり後ろからやってきた彼の妹に、二人そろって川へ突き落とされた。

起き上がったガストンが妹を捕まえると、そのまま川へと放り投げる。

三人で腹を抱えてゲラゲラ笑った。

今にして思えば、二人は自分を気遣ってくれていたのかもしれない。

そんなことをしているうちに、ガストンは王都の騎士養成学校へ行くことになった。

トマスも誘われたが、それを機に旅に出ることにした。

その頃には、父親の最後の願いが、重要なものではないかと思いはじめていたからだ。

全てを話し終わると、トマスは果実水を一口飲んだ。

酒場の喧騒が今更のように耳に戻ってきた気がする。

彼女は、何か考え込んでいる様子だった。

不意に顔を上げると、少し気遣うような素振りを見せた。

「その、悪かったわね。私も急に熱くなり過ぎたわ」

「別に気にしてないよ。もう随分昔のことだし、心の整理は終わってる。……そんなこんなで今に至るってわけ」

「そう……」

少し間を置いてからトマスは切り出した。

「良ければ、リサの話も聞かせてくれないかい？」

あれだけ強く迫ったのだ。

トマスと似たような事情があっても不思議ではない。

「私の方はあなたと少し違うけど、似たようなものね」

「へえ……？」

「私には、お姉様がいるんだけど、ずっと長い眠りについてるの」

「え、それって……」

彼女は緩やかに首を横に振った。

「死んだとかじゃなくて、今でもベッドで眠っているのよ」

「何かの病気なの？」

「何人もの医者や治癒術師に見せたけど、誰もが最後には言っただわ。お手上げだっただわ。彼女の家がお金持ちだと分かったが、今はどうでもいいことなので、とりあえず黙っておく。」

「だけど最後に話したときに、お姉様にこう言われたの。『一人前の魔術師になったら、東に行きなさい』って」

「え……東って言うのと、一番奥にはエルフの森があるけど……」

王都を基準に考えた場合、大陸の東の終わりには、エルフの森が広がっている。

「私もエルフの森だと思って、東へ行ってみたの」

「へ、へえ……そうなんだ。行ってみたんだ……」

トマスはちよつと引き気味に返事をする。

ただ漠然と東と言われても、それだけでは何のことを指していて、どうすればよいのかも分からないはずだ。

わずかな情報を頼りに、そこまでするとは、なかなかの行動派のようだ。

彼女にとって、その姉はとても大切な家族らしい。

「でも結局、どうにもできなかつたの。エルフ達は、私のことなんてまるで相手にしてくれなかつた」

結局森に入れなかった彼女は、エルフの森を引き返して情報収集を行った。

しかし、何も成果は得られなかったという。

「あれ？ それだったら、どうしてここにいるの？」

スタラントの村は大陸の西にある。

奥が鉾山となっていることから、ここが西の終わりとなるが、正反対の方角である。

「私が探した限り、東には何も見つからなかったわ。だから、一度は家に戻ったの。それでお姉様の部屋に入ったら、机の上に手紙が置かれていたの」

宛名は何も書かれていなかったの、彼女は開けようか迷った。

長い時間を悩んだ末に開けてみると、その手紙は自分に宛てたものだったという。

彼女の姉は、必死に眠気と戦いながら書いたらしく、ほとんどの文字は崩れて読めなかったらしい。

時間をかけて何とか読み解いてみると、ほとんどは彼女を気遣う内容らしいと見当がついた。

そして残り数少ない、かろうじて正確に書かれた箇所は、たった一つの単語だけだった。

それが――

「「イデアのシズク」」

二人の声が重なった。

彼女がそこだけは正確に書いたということは、リサに何としても伝えたかった内容である可能性が高い。

だから彼女は、あれだけトマスに迫ったのだという。

本当なら、東に行けという数少ない情報と照らし合わせて考えるべきなのだろうが、エルフ達は相手にしてくれない。

東がダメだったので、ひとまずは西に行ってみることにしたという。まるで雲をつかむような話だ。

彼女は、姉に対してできることは、何でもしてあげたかったらしい。

「ねえ、もし良かったらなんだけど……私と組まない？」
「えっ？」

「私も、その……火竜の洞窟に用があるから」
少しためらったのは、最初にあいまいに答えてしまったからだろう。

「僕は構わないよ。人数は多いに越したことはないだろうし」
一流の魔術師である彼女と一緒に心強いだろう。

「じゃあ、これからよろしくね」

「ええ」

トマスが笑みを浮かべて手を差し出すと、彼女は、ほっそりした手で握り返してくれた。

・洞窟へ

翌朝、準備を終えたトマスは、宿屋の階下に降りていく。

あれだけ騒がしかった酒場兼食堂に、客の姿はほとんど見えない。

宿屋の出入口に程近いカウンターに、リサが座っていた。

トマスが大きな皮のリュックをリリアーナに預けていると、リサが近づいてきた。

「そういえばさ、魔術師ギルドで何か情報は得られなかったのかい？」

朝の挨拶もそこそこに、トマスはリサに尋ねた。

魔術師ギルドというのは、魔術師を支援する組織のことである。

大抵はどここの街や村にも支部があつて、魔術師ギルドに登録している魔術師は、支援を

受けることができる。

大冒険者時代には、戦士ギルドや盗賊ギルドなど、様々な職種のギルドが乱立していた時期もあつたらしい。

だが結局、支部の数が一番多かつた魔術師ギルドの組織力には敵わなかつたらしく、冒険者の数が緩やかに減りつつある今では、魔術師ギルド以外のほとんどのギルドが、姿を

消してしまい、魔術師ギルドと統合されていた。

今では冒険者ギルドとしての意味合いが強くなっており、名前はその名残のようなものである。

冒険者や魔術師でなくとも、普通の村人が何かの相談に行ったり、手に入った素材を売りに行くこともある。

しかし魔術師のギルドという部分はしつかりと残っており、魔術師なら優遇されることも多い。

だが彼女は残念そうに首を横に振った。

「一応行ってみたけど、ダメだったわ。村長の奥様と何人かの職員だけの小さなギルドだったから」

「うーん、そっか……」

このような山村のギルドでは、それも仕方ないのかもしれない。

「あ、そうだ。言い忘れてたんだけど、案内人を買って出てくれる子がいてさ」

「あら、そうなの？」

そこでトマスは、宿に来るまでの一連の流れを彼女に話した。

「ドワーフの人に案内を頼めるのはありがたいわ。もしかしたら洞窟内でドワーフの人に

しか分からないことがあるかもしれないし」
彼女は納得した様子でうなずいた。

二人で宿屋の外に出て待っていると、エリーナがやってきた。

「こんにちは、トマスさん。今日はよろしくお願いしますね」

そう言っただけで彼女はにこやかに笑うと、隣のリサを見て不思議そうな顔をする。

「えっと、こちらの方は？」

リサが前に進み出てきて、微笑みを浮かべる。

「リサ・ワーズノースよ。彼と目的地が同じだから、一緒に行くことにしたの」

「そうなんですか。私はエリーナ・アステルっています。よろしくお願いしますね」

トマスは、リサが笑ったところを初めて見た。

そして彼女でも笑えるんだなと、結構失礼なことを思ってしまった。

「今日はお弁当を作ってきたんです。たくさんありますから、リサさんの分も用意できま
すよ」

彼女は、手にしたバスケットを見せてくる。

「悪いね。そこまでしてもらっちゃって」

ポーション一つに対する対価としては、既に超えてしまっている気がするのだが、あの後、エリーナの方から申し出てくれたので、無下にもできなかつたのだ。

「じゃあ、案内しますね。行きましようか」

大通りの緩やかな上り坂を歩いていくと、やがて採掘場前の広場が見えてきた。

採掘場なだけあって、辺りはゴツゴツとした岩だらけだ。

入口には半鐘の吊り下げられているヤグラがあった。

火竜の洞窟へは、ここから別の道があるそうだ。

ヤグラから一人のドワーフの男性が降りてきた。

「やあ、エリーナちゃんじゃないか」

「グレゴリーさん、こんにちは」

どうやらエリーナの知り合いらしい。

ドワーフの男性らしく、ずんぐりとした体形で、厚手の丈夫そうな作業着を着ている。

アゴの周りは真っ黒なヒゲが伸びていて、腕の太さはトマスの倍程もありそうだ。

クセの強い黒い髪が、頭を覆うように伸びている。

「グレゴリーさん、今日はお仕事はいいんですか？」

「いやほら、今は王都の連中が来てるだろ？　連中があっちこっちを行ったり来たりしててさ、正直、今日は仕事にならないんだよ。それで半鐘でも掃除しようかと思っただけじゃなくて、みんな今日はそんな感じだよ」

彼はやれやれと頭をかいた。

ドワーフの男性は老けたような顔の人が多く、みな似たような姿なので分かりづらいが、話し方からすると、自分達とそう変わらない年齢のようだ。

「ほんと、その通りよ。邪魔だったらありやしない」
そこへリツカがやってきた。

ガラガラと大きな手押し車を押していて、中には鉱山から掘り出された鉄鉱石らしきものが積まれている。

彼女は、いつも広場で手伝いをしているそうだ。

「鉱山の様子はどうなんだい？」

トマスは尋ねた。

「王都の連中が、何人かここで働いてる人を連れて行って掘らせてるわよ。んで、連中はその人達に掘るのを任せて、何してんのか知らないけど、あちこち調べてんのよ」

「へえ……なるほどね」

危険が伴う鉱山の中を必要以上にウロウロされて、迷惑であろうことは想像に難くなかった。

「エリーナちゃんは、どうしてここに？」

そこでエリーナはグレゴリーに二人を、リツカにリサを紹介する。

そして、火竜の洞窟へ二人を案内することを話した。

「ははあ……なるほど」

グレゴリーはエリーナやリツカと親しいらしく、訳知り顔で納得する。

よく見ると、小さく笑っているように見える。

「どうせヒマなんだし、あんたも手伝いなさいよ」

リツカはグレゴリーの肩をぱしんと叩いた。

「よしてくれよ、僕は冒険とかはごめんだ。家で装飾品の細工でもしてるほうがいいよ」
グレゴリーは首を竦めて、半鐘を拭いていたであろう布をいじった。

偏見でしかないのは分かっているが、彼は勇敢だと言われるドワーフ族の男性らしからぬ臆病な性格のようだ。

そんな事情もあって、今日は手の空いたドワーフ達は、鍛冶仕事の手伝いに行っている

者も多いらしい。

彼もこの後、手伝いに行くそうだ。

グレゴリーとリツカに見送られて、三人は火竜の洞窟へと歩いていった。

三人は火竜の洞窟へとたどり着くと、中へと入っていく。

洞窟の中はひんやりとしており、道の幅は意外にも広がった。

採掘場同様、ゴツゴツした岩が、むき出しになっている。

トマスは雑のうからランタンを取り出すと、火を点ける。

多少の明かりならば、魔術でも事足りるのだが、洞窟がどれだけ広いか分からない以上無暗に魔力を消耗するのは危険である。

それ故、魔術が日常生活に溶け込んでいても、こうした道具の出番が失われることにはならない。

先頭に立ったトマスは、洞窟内を歩き始める。

「エリーナは、ここに来たことがあるんだよね？」

リサは慣れた動きで前へ出ると、杖を構える。

「炎よ……獣の形となりて、我が敵を焼き尽くせ！ フレイムビースト！！」
杖の先から生まれた炎の塊は、みるみるうちに大きくなり、四本足のトラのような形になった。

炎の獣は地面を蹴りつけて、ゴブリンの群れへと突進していく。

「ギャウウウウ！！」

先頭を走っていたゴブリンが、為す術なく焼かれていく。

後続のゴブリン達は慌てふためくが、後ろがつかえているせいで、どうすることもできず次々と焼かれていく。

彼女は、あれだけの魔術を使っているのに、消耗している様子はない。

魔術師は魔術を使う際、自分の魔力の消耗が少なければ少ない程、マナの扱いが上手い程、熟練した魔術師と言える。

しかし、なかには知恵の働く者もいたようだ。

次々焼かれていく仲間を盾に、どうにか炎の獣の脇をすり抜けて、こちらへと向かって来る者が出始める。

トマスはランタンをエリーナに預けると、腰からブロードソードを引き抜いた。

「ギエイ！」

ゴブリンの無造作に振りかぶった一撃を、後ろに下がってかわすと、がら空きになったところに袈裟斬りを見舞う。

ゴブリンは、血飛沫を上げながら地面に倒れる。

後ろからやってくるゴブリンに、トマスが剣を構え直したときだった。

「トマスさん！ 横に跳んで下さい！」

後ろから聞こえたエリーナの声に、考えるより先に体が動いた。

右横へ体を動かしたトマスの左隣を、小さな斧が回転しながら通り過ぎていく。

エリーナが、腰に下げていた護身用の投げ斧を引き抜き、ランタンを持ったまま器用に投てきしたのだ。

バスケットは地面に置かれていた。

こちらへ突進してきていたゴブリンがすぐに気づいたが、もう遅い。

斧のスピードに自分達の突進のスピードまで加わり、先頭のゴブリンは哀れにも頭をかち割られる。

斧の威力はそれだけに留まらず、二匹三匹と次々にゴブリンを仕留めていく。

エリーナの投げた斧は、見た目はフランキスカと呼ばれる武器に近い。

この手の武器は、投げる際にバランスを取るために柄が長いことが多い。しかし、エリーナの投げた斧は、金槌よりやや長い程度の長さしかない。だがそんなことはお構いなしだ。

斧はゴブリンを葬りながら、串刺しにする軌道を描いて飛んでいく。

実に十匹ものゴブリンを仕留めたところで、ようやく岩にぶち当たって止まった。その岩ですら、いくつものヒビが入り、勢い余った斧がビィィンと震えている。

急所に当たらなかつたゴブリンも、斧が当たった部分は内部から爆発したような有様で、立ち上がってくる者は一匹もない。

エリーナはドワーフ族だ。

小柄な少女でモンスターと戦い慣れてなくても、人間より優れた腕力を持っている。頭では理解していたつもりだったが、こうもはつきりと見せられると、笑う他なかつた。

本来案内人が現役冒険者であることは少なく、元冒険者であっても、補助に回ることが多いのだが、彼女の場合は、当てはまらなそうだ。

結局ゴブリンのほとんどを、リサとエリーナが片付けてしまった。

トマスが倒したのは一匹だけだ。

一応このメンバー唯一の男のはずだが、恰好がつかないことこの上ない。

リサが岩に刺さった斧を引き抜いているエリーナに声をかける。

「ウワサには聞いていたけど、すごい威力なのね」

「い、いえいえ……そんな……」

エリーナは褒められて照れているのか、顔を赤くしている。

手にしている斧の刃は分厚く、あまり鋭いようには見えない。

刃が細くて鋭いと、ドワーフの腕力では衝突したときに折れてしまうからだろう。

「どうやら私が前に立った方が良さそうね」

エリーナからランタンを受け取って、リサは歩き出した。

トマスとエリーナもそれに続いていく。

モンスターの中では弱い部類に入るとはいえ、ゴブリンは数が結構多かった。

彼女に任せた方が安心だとトマスも思った。

洞窟の中を三人の足音だけが響いている。

「さっきのは、他のドワーフの人達もできることなの？」

リサは興味を持ったようで、エリーナに尋ねる。

「ドワーフの女の人なら誰でもできますよ。十歳になる頃には、親から練習させられるんです」

ドワーフの女性は護身のために、小さな斧の投てき術を身に付ける。

エリーナの祖父は彼女には優しかったが、この投てき術だけは、しっかりと身に付けさせられた。

木の実の採取などで山に入ったときに、野生の獣やモンスターと遭遇したときのための護身用らしい。

この斧は日常でもマキ割りなどの道具としても使えるので、持ち歩いていて困らない。先程は十匹ものゴブリンを倒したが、目的としては威嚇の意味合いが強い。

なぜ投げ斧なのかというと、女性は子供を授かるからなのだそう。

子供を身ごもっているのは、護身用の武器を持ち歩いても、満足に振るうことができない。飛び道具としては弓などもあるが、日常生活の中で持ち歩くには難がある。

使い捨てを前提としているものの、野生の獣が驚いて逃げたときなどは、そのまま拾って回収することもできる。

本来の用途からは逸れてしまいが、投げる前に襲いかかってきたときは、そのまま握って武器として使うこともできる。

鍛冶師の間でも広く取り扱われており、ドワーフの村では補充も容易なのだそう。スタラントは山の中にある村だ。

子供を授かったからといって、女性であつても仕事をしないわけにはいかないのだろう。「ちなみに、どうして広まったのかというのには、三つの説があるんですよ」
一つ目はドワーフの女性が木の伐採をしていたときに、大きなクマと遭遇し、伐採用の斧を豪快に投げつけて、仕留めたという逸話によるもの。

二つ目は鍛冶師の弟子が、親方から一人前になるための試練として、題材に上げられたというもの。

シンプルな小さい斧だからこそ、腕の見せどころというわけだ。

三つ目は若いドワーフの青年が、想いを寄せている女性に気持ちを伝えるものとして、手渡したというもの。愛の告白というやつだ。

受け取ってくれたら夫婦成立となり、周りから祝福されるのだ。

「私は三つ目だったらいいなあと思って思ってるんです」

エリーナが夢見心地な顔をしながら話した。

「ふふっ、そうね。夢があつていいと思うわ」

リサは前を向いているので顔は見えないが、楽しそうな雰囲気伝わってくる。

会話をしていた三人は、三叉路へとやってきました。

「これはどの道を行けばいいのかしら？ エリーナ」

道は上り坂になっっている左と、平坦な道の真ん中と右がある。

「洞窟の奥へ行くには、真ん中の道になります。左の上り坂は結構遠回りになるんですけど、採掘場に続いています。右は行き止まりですね」

「へえ、なるほど。エリーナに来てもらって助かったよ」

「そうね。採掘場にたどり着いていたら、無駄骨になっていたわ」

「お役に立って良かったです」

エリーナは嬉しそうに微笑んだ。

三人は洞窟を奥へと進んでいく。

トマスは、先頭を歩くりサの姿を眺める。

魔術師というのは不遇な職業である。

なぜなら、魔術師でなくとも魔術は広く使われているものだからである。

剣士であつても弓使いであつても、魔術は使えるし、トマスもいくつか身に付けている。

無論、魔術の種類によって向き不向きはあるし、全く使えない人が、いないわけではないが、そこまで深刻な問題でもない。

そして、モンスターを倒す、という点だけで見れば、魔術の習得の幅が広がっても、あまり意味がないのである。

炎の魔術であつても、風や土の魔術でも、倒すだけなら事足りるからだ。

例えば、砂漠にいるデザートリザードに、炎の魔術が若干効きにくいことは事実である。だが湿つた木材でも、大火力で焼き尽くせば炭になつてしまふように、魔術の種類による耐性は影響が小さく、効きにくいなら魔術の威力を上げれば良いだけである。

そもそも魔術にこだわる必要もない。

武器を持ち歩いて、それに対応すれば良いだけのことである。

飛び道具であるという点も、弓などで対処できるし、そういった相手にだけ覚えていゝる魔術で対応すればいい。

自分の魔力がなくなつてしまえば力を発揮できないのも、無視できない点である。

それでも魔術師を目指す人はいる。

ギルドを頼り、衣服からマナを得る術を身に付け、魔術の種類ごとの特徴を使い分けて魔術師達は戦う。

そもそも魔術師ギルドが大きな組織となつたのは、不遇と言われる魔術師達の立場を少しでも良いものにするためである。

彼女が一流の魔術師であることは、先程の戦いからも間違いない。

それ故に、彼女に今までどんな苦勞があつたかと思うと、トマスは複雑な気持ちになつ

た。

「そういえば、リサはどうしてこの洞窟に行こうと思ったんだい？」

「この洞窟から微かに魔力を感じたからよ」

「魔力？」

「ええ。二人は感じないかしら？」

トマスはエリーナと顔を見合わせる。

言われてみれば、そんな気がしないこともないが、正直なところよく分からない。

そんな二人の様子を感じたのか、リサは肩を竦める。

「何と言えばいいのかしら……暖かいスーパの上に立つ、湯気のような感じなのだけれ

ど……分からないなら、それでも構わないわ」

トマスは、あてもなく西を旅して、最後に、ここへたどり着いただけだ。

リサの話は聞いていたものの、彼女には、この洞窟に来た根拠があったようだ。

三人は、緩やかな下り坂になっている洞窟内を奥へと歩いていく。

時折ゴブリンが数匹現れては、三人で協力して倒していった。

しばらく歩いたところで、やがて開けた場所に出た。

天井が高くなっており、真ん中には大きな裂け目が走っている。

下をのぞいてみるが、黒インクを流し込んだように真っ黒な深淵が広がっているばかりだ。

こちらと向こう側をつなぐように橋が架けられている。

モンスターの気配は、これまで来た道にも、向こう側からも感じられない。

「どれだけ時間が経ったか分かりませんが、お昼にしましうか」

「そうだね。食べられるうちに食べといた方がいいよ」

エリーナの提案で昼食にすることにする。

橋のたもとに程近い場所に、三人は腰を落ち着ける。

エリーナは、バスケットを脇へと降ろした。

バスケットの中にあっただのは、野菜を挟んだ丸パンだった。

地面に向かって手を軽く振ると、地面がコの字に小さく盛り上がる。

バスケットから、手の平を広げたぐらいの小さなフライパンと、包んであった肉を取り出した。

手をかざして炎を出すと、手慣れた様子で焼き始める。

「準備がいいね」

トマスは感心した様子でそれを眺める。

「一応火は通してあるんですけどね。温かい方が美味しいですから」

日常生活で使う魔術は、詠唱を必要とせず、身振り手振りで使うことができる。戦うときに使う魔術と比べると規模は知れているが、魔力の消耗も少ない。

エリーナは元々案内人なのだから、日常の魔術を使っても問題はないだろう。

温まった肉をパンに挟んでもらうと、三人で口に運んだ。

野菜のシャキシャキ感の中に、温まった肉汁が染み込んできて美味しい。

エリーナの得意な日常の魔術は、火と土らしい。

橋の下から吹いてくる涼しい風に吹かれながら、三人は和気あいあいと食事を楽しんでいた。

・彼の日常

トマスが乗っていた商隊の馬車が急停止する。

「すまん、モンスターが現れた！ 戦える者は手を貸してくれ！」
商隊の仲間の一人が、大声を上げながら、次々と声をかけていく。

トマスは、老騎士と一緒に馬車を降りていった。

周囲では既に雇われた商隊の護衛が、モンスターと戦っている。

不意にその内の一体が、馬車の陰から躍り出てきた。

筋骨隆々の腕に、タルのような体を持つオークだった。

手には、粗末なこん棒が握られている。

「ふむ。この程度なら君でも対処できるだろう。後は任せるぞ」

（え……本気で言ってるの、この人……）

トマスが何か言おうとする前に、老騎士は走り去っていく。

トマスは右手のブロードソードと、左手にある老騎士から借りたラウンドシールドを構える。

他の連中が戦っているオークと比べると小柄で、成体前の個体なのかもしれない。それ以前に、モンスターに成長という概念があるのかどうか分からないが。

「やるしかないんだよなあ……」

トマスは逃げ出しなくなる気持ちを抑える。

「グオオオオオオオ！！」

オークが腹の底に響く絶叫を上げて、襲いかかってきた。

手に持ったこん棒を横薙ぎに振ってくる。

トマスは冷静に後ろに下がると、こん棒を振り切った直後のスキを逃さず、剣を振るう。

オークから不気味な色の血が飛び散り、血走った目でギョロリと睨みつけてくる。

出血で理性を失ったのか、オークはこん棒を滅茶苦茶に振り回した後、真上から振り下ろしてきた。

思わず避けそうになるが、両足で踏ん張って、ラウンドシールドで受け止める。

腕が折れたんじゃないかと思うような衝撃が襲ってくるが、そのまま体の外側へと盾を動かして軌道をずらすと、勢い余ったオークのこん棒が宙を泳いだ。

右手のブロードソードをオークの喉元に突き入れると、首がガクツと一瞬ブレた後、地響きを立ててオークは倒れた。

ドオン！！

何かがぶつかる衝撃音に、トマスがその方向へ顔を向けた。

武骨なタワーシールドで、老騎士がトマスと戦ったオークより二回りは大きいオークの攻撃を、真正面から受け止めていた。

老騎士の眼光は鋭く、今尚衰え知らずだった。

「ひえ……信じられない。化け物かな、あの人」

白髪の短い髪を衝撃で震わせながらも、一步も引いていない。

今年で六十を超えたとか言っていたが、どこにあんな力があるのだろうか。

「はあああああつ！！」

彼は両足を動かさなのまま、再度全身に力を込める。

辺りに再度鈍い音が響いた。

オークのこん棒と押し合いをしていた状態から、老騎士が自分の力だけで、押し返したのだ。

押し合いに負けたオークが、後ろへ数歩ふらついた。

そのスキを逃さず老騎士はタワーシールドを手放すと、裂帛の気合と共に、両手で握ったサーベルを真横へ一閃する。

腹を斬られたオークは、間欠泉のように血をまき散らしながら、後ろへと倒れていく。それを見届けて一息ついた老騎士は、呆然と自分を見ていたトマスと目が合った。途端に老騎士は相好を崩し、好々爺然とした顔になる。

「ほっほ。そちらも終わったようですね。いやお互い無事で良かった」
「ははは……」

トマスは何も言えなかった。

しばらくして、商隊を襲ったオークはすべて撃退できたとの知らせがもたらされる。護衛に雇われた治癒術師がケガ人を治療して、戦った者達が馬車に乗り込んでいく。やがて商隊は、ゆっくりと進み始める。

「君には、なかなか素質があるようだ。最後に君と巡り合えて良かった」
老騎士と隣り合って馬車の荷台の隅に座っていると、彼は満足そうにうなずいた。

「ははっ、そう言ってもらえて良かったです」

老騎士は王都での務めを終えて、これから故郷に帰るところなのだそうだ。

たまたま乗り合わせたトマスは、この老騎士と気が合った。

話しているうちに、トマスに武器を扱う能力がないと分かると、彼は首を緩やかに横に

振ったのだ。

『君、旅をするというなら、自分の身ぐらいは自分で守らなくてはいけないよ』
そう言って、老騎士は時間の合間、トマスに剣の扱い方を教えてくれた。

彼からしてみれば、最後の後進の育成をしている気分なのだろう。

もしくは、孫の相手でもしている気持ちだったのかも知れない。

最後の最後でオークを任されるとは、トマスは夢にも思わなかったが。

何日か日々が過ぎ去ると、老騎士は故郷近くの村で馬車を降りていった。

トマスは老騎士の教えを忘れないように、ヒマを見つけては剣を振っていた。

素質があると言われて、当時は嬉しかったのだ。

またある時、トマスは広大な湖を往復する渡し船に乗ったとき、ナタリー教の信者と乗り合わせた。

金色の長い髪をした若い女性だった。

既に結婚して子供もいるそうだが、とてもそうは見えない。

夫と子供を家に残して、聖地巡礼の旅に出ているという。

女性の一人旅は危険を伴うが、なにか事情があるのだろう。

他にも数人の旅人がおり、のどかな空気に包まれて船は向こう岸へと近づいていく。

ところが向こう岸へ着いた途端、草原の茂みから野犬の群れが襲いかかってきた。

のどかな空気は一変し、瞬く間に怒号と悲鳴が広がっていく。

渡し船にいた護衛が盾となり、一旦渡し船で岸を離れたが、信者の女性が船に乗り遅れてしまい、取り残されてしまった。

岸に戻れば、より多くの人が被害に遭う可能性があるのです、船は戻るに戻れない。

トマスは意を決して、皮のリュックを渡し守に預けると、船から助走をつけて岸へと飛び移った。

護衛達は鎧を身に着けていて、鎧を脱いでいたら間に合わない。

間一髪のところでは助けには入れたが、数で勝る野犬の群れは、決して楽な相手ではなかった。

無我夢中でブロードソードを振るい、なけなしの魔力で魔術を放った。

そうこうしているうちに、鎧を脱ぎ終えた護衛達が、船から飛び移ってきて加勢してくれた。

気がついたときには、野犬はみな地面に倒れていた。

「光よ……この手に癒しを与えたまえ……ヒールライト」

光の魔術を信仰の対象とするナタリー教の信者や教徒は、光の魔術の一つである治癒魔術を習得しようとする者が多い。

例え習得できるのが初歩の治癒魔術であつたとしても、信仰する対象をより身近に感じられるからなのだそうだ。

だが、丁度トマスの番になつたところで、彼女の魔力が尽きてしまった。

もしかしたら、彼女は光の魔術に向いていなかったのかもしれない。

魔術というのは、人によって向き不向きの素質が、ある程度決まっている。

それは種族由縁のものだったり、家系だったり様々だが、特に苦手な魔術に関しては個人差が強く出ると聞く。

苦手な魔術の場合、日常で使う魔術すら使えない者も珍しくない。

トマスは、自分の傷を自前のポーションで癒すことにした。

渡し船が戻ってきて、ようやくその場の全員が人心地ついた。

渡し守に預けた皮のリュックを返してもらっていると、彼女が近づいてきた。

一番最初に助けに入ったトマスに、お返しができないどころか、ポーションまで使わせ

てしまったことに、責任を感じているようだった。

「自分用に持ち歩いているものを使ったのだが、彼女には慰めにならなかつたようだ。」「じゃあ、代わりに光の魔術を教えてよ」

聞けば、彼女とは行き先が途中まで同じらしい。

道中でトマスは、彼女に光の魔術をいくつか教えてもらった。

何日か旅をするうちに、二人は分かれ道に差しかかった。

「魔術、教えてくれてありがとう」

「上達が早くて驚きましたわ。こんな短期間でここまで使えるようになった方、私、初めて見ました。もつと練習すれば、私よりも上手くなれますよ。これもナタリー様のお導きですわね」

最後に神様で締めくくろうとするのが彼女らしい。

彼女とはそこで別れて、トマスは道の先へ向けて歩き出した。

旅をしていると、トマスは色々な人に出会うことがあった。

薬を必要としていて、でもお金が払えないときは、トマスはその人から何かを学んだ。親切にも向こうから教えてくれたときもある。

トマスはそれを決して疎かにしているつもりはなかった。

ヒマを見つけては剣を振って、教えてくれた魔術を試した。

そして、トマスに指導をしてくれた人は、みんなこう言った。

「筋がいいね」と。

みんな口をそろえて。

だが、剣にしても魔術にしても、トマスの実力が、それ以上伸びることは無かった。実際には、少しずつ伸びてはいるのだろう。

だが成長速度が圧倒的に遅かった。

トマスは旅に出て本当に良かったと思った。

誰かと比べられたら、多分嫌な気持ちになっていただろうから。

・宝石

「雷よ……荒れ狂うムチとなりて、宙を駆け抜けろ！　ライトニングウィップ！」
「キイイイ！」

天井付近を飛んでいた大型のコウモリのナイトバットが、次々に電撃のムチに打たれ、地面に落ちてくる。

「ねえ……そろそろ引き返した方がいいと思う？」
リサが、少し迷う素振りで見かねてくる。

三人は、昼食を食べ終えて橋を渡り、洞窟の探索を続けていた。

「そうだなあ……洞窟の中だから分からないけど、もうお昼は過ぎたんじゃないかなあ……」

トマスは思案する。

お腹が空いて昼食をとったからといって、お昼であるとは限らない。

エリーナは、この洞窟のことは橋のあったところまでしか知らないらしい。

お力になれずすみません、と申し訳なさそうにする彼女だったが、エリーナは十分力に

なつてくれている。

「んー……もう少し行ってみて何もなかったら、今日のところは引き返そうか」
「そうね。今日一日に、こだわる必要もないわ」

リサもトマスの意見に同意する。

そのとき、不意にエリーナが立ち止まった。

「あの……何か変なニオイがしませんか？」

「え、ニオイ？」

トマスはくんくんと嗅いでみるが、特に違いを感じられなかった。
どうやらリサも同じようである。

妖精族であるドワーフは、人間よりも五感が優れているとされている。

トマス達には分からないニオイに気づいても、不思議ではなかった。

「もしかして、何かの毒なのかしら？」

リサが、警戒するように身構える。

「じゃあ調べてみようか」

トマスは雑のうからボロ布の包みを取り出すと、縛っていたヒモを緩める。

すぐに開いてしまわないように、少し強めに布の口をねじると、進行方向の暗闇に向かっ

て投げつけた。

ボフン、という音がして、ボロ布に包まれた粉末が飛び散った。

「明かり、照らしてみて」

トマスに言われるまま、リサはランタンを前へと突き出した。

辺りには黄色い粉末が舞っていた。

「もし毒だったら、この粉が緑色に変わるから、大丈夫だと思うよ」

これはトマスが解毒剤を応用して作ったものである。

怪しい場所に投げ込めば、空気中に毒が含まれているか、すぐに分かる。

欠点は粉まみれになって、息がしづらくなることだが、毒で命が脅かされるよりはマシである。

三人は一応前よりも警戒しながら、ゆっくりと洞窟内を歩いていく。

洞窟は、緩やかな下り坂が続いていた。

涼しかった洞窟内の気温が、わずかに上がってくる。

やがて三人は洞窟の奥へと、たどり着いた。

・あとがき

ここまでお読み下さり、ありがとうございます。

体験版はいかかでしたでしょうか？

この後、彼らは大変な事態と向き合うことになります。

なお、製品版には、ささやかですが、おまけの短編も付いています。

それでは製品版でお会いできることを願っております。

貴重な時間を割いていただき、ありがとうございました。

・ 本作品の画像及び文章の無断転載・複製・再配布・改変などはご遠慮下さい。

・ 本作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件とは一切関係ありません。

・ 本作品に関して発生したトラブルによる一切の責任を負いません。

・ 表紙イラストをブログやSNS等のアイコンや素材としての二次利用など、イラストレーター様のご迷惑となるような行為はご遠慮願います。